

サバハッティン・アリ研究

- アナトリアを描いた『新しい世界』を中心に -

南・西アジア課程トルコ語専攻 4 年

学籍番号 8502043

倉本さをり

1	はじめに	3
2	サバハッティン・アリについて	5
2.1	生涯	5
2.1.1	幼年期	5
2.1.2	学生時代	5
2.1.3	ドイツ留学と社会主義への傾倒	6
2.1.4	弾圧と監獄生活	9
2.1.5	亡命と最期	11
2.2	人物像	12
2.2.1	幼少時代～学生時代	12
2.2.2	読書	13
2.2.3	交友関係	15
2.2.4	ドイツ留学の影響	16
2.3	作品について	18
2.3.1	詩	18
2.3.2	長編小説	19
2.3.3	短編小説	19
3	短編作品について	22
3.1	文章	22
3.2	作風の変遷	23
3.2.1	ロマン主義からリアリズムへ	23
3.2.2	現実主義－アナトリアへの視座－	28
3.2.3	視点の変化－アナトリアの描写から都市社会批判へ－	34
4	『新しい世界』に見るアナトリア	36
4.1	扱われるテーマ	36
4.1.1	村人と知識人	36
4.1.2	子供	38
4.1.3	農村の女性	40
4.1.4	村人と都市	43
4.1.5	村人と憲兵	46
4.1.6	その他	47
4.2	風景描写	48
4.2.1	村の様子	48
4.2.2	自然描写	50
5	おわりに	54
6	<文献表>	55

1 はじめに

トルコ文学には、時代によって様々な潮流があり、それらに従い多くの作家が存在している。本論では、その中の一人、作家サバハッティン・アリとその作品を扱う。サバハッティン・アリは、トルコ文学において作家サイト・ファイクと並んで農村文学初期の代表者として認識される作家である¹。

農村文学は、共和国初期に始まった。サバハッティン・アリ以前にも農村を取り上げた作家たちは存在していた²が、彼らの作品はどれも共和国の原則に反することなく農村の様子を描いただけのもので、社会構造や農村の問題を扱うものはなかったという³。これは農村文学のみならず、当時の文学全体に共通する特徴であった。共和国初期に作品を残した作家たちは、オスマン帝国期から続いた政府高官による芸術家の保護の影響を色濃く残し、政府のイデオロギーに反する作品を書くことはなかった⁴。こうした中であって、共和国に入ってから作家として歩みだしたサバハッティン・アリは農村を批判的に描き、その後発展していく農村文学の先駆者となった⁵。サバハッティン・アリはロマン主義から出発し、時代と共にリアリズムへと移行していった作家である。彼が農村を描いた作品を残したのは、この移行期であり、ロマン主義とリアリズムが混ざり合った農村作品は、注目に値する。トルコで初めて農村を忠実に見つめ、描こうとした作家がどういう人物であったのか、またその作品に描かれた農村とはどのような場所であったのか、これらを知ることは重要である。

本論ではまず、サバハッティン・アリを考える上で、彼の生涯、人物像を明らかにする。これは、その後作品を読み進める上でも有用である。次に、サバハッティン・アリの作品について概観する。サバハッティン・アリは最初から農村に焦点をあてていたわけではない。初期作品にはロマン主義の影響下で恋を主題にした作品を多く残し、また晩年の作品では都市社会の批判を行った。この大きな作風の変遷を時系列ごとに追い、その作風の変遷がなぜ起こったかについて考えていく。それを明らかにすることで、農村が描かれるようになった背景や、描かれた農村を分析する手掛かりを得られると考える。そして最後に、サバハッティン・アリがアナトリアを描いた作品に焦点をあて、サバハッティン・アリのアナトリアに対する姿勢や、その作品に描かれたアナトリアの土地がどのような場所であったのかを明らかにする。

¹ Şükran Kurdakul, *Çağdaş Türk Edebiyatı IV*. Ankara: BilgiYayınevi, 1992, p.14. (以下、Kurdakul)

² レシャット・ヌーリ・ギュンテキン、ヤクップ・カドリ・カラオスマンオウルなど。

³ Ramazan Kaplan, *Cumhuriyet Dönemi Türk Romanında Köy*. Ankara: Mas Matbaacılık, 1988, p.43. (以下 Kaplan)

⁴ Cevdet Kudret, *Türk Edebiyatında Hikaye ve Roman*. İstanbul: İnkılap Kitabevi, 1990, p.13. (以下 Kudret)

⁵ Kaplan, p.44.

またその際、短編集『新しい世界』を中心に扱う。サバハッティン・アリは詩、短編小説、長編小説、脚本、風刺新聞と様々な形で作品を残しているが、なかでも短編作品の数は最も多い。また、サバハッティン・アリの作風の変遷が如実に現れているのも短編作品である。その中でも特に『新しい世界』は、サバハッティン・アリの農村文学の集大成とも言える短編集である。

ここでサバハッティン・アリの短編小説の出版状況について触れておく。サバハッティン・アリは、全短編作品を当時の雑誌に発表している。その後、それら短編作品を集めた短編集が出版されている。初の短編集は、ヤプ・クレディ出版 (Yapı Kredi Yayınları) から1935年に出版された『水車』である。その後同出版社から『牛の引く荷車』(1936)『声』(1937)が出された。さらに、ヤプ・クレディ出版からは、1997年に短編作品全集が二冊⁶出版されており、2002年に第7版が発行されている。本論で引用する短編も、すべてこの第7版からとった。

サバハッティン・アリについての研究は、現在まで残るものは多くない。しかし、アスム・ベズィルジによる研究⁷は優れたものであり、サバハッティン・アリについての他の研究でも彼の意見が頻繁に引用されていることから、その有用性がわかる。Bezirci, *Sabahattin Ali* では、サバハッティン・アリの生涯、人物像、サバハッティン・アリ自身や彼に親しい人々の発言、作品の詳細な分析など、サバハッティン・アリに関わる事物が包括的にかつ詳細に扱われており、大変参考になるものである。本論では全体に渡りこのベズィルジの研究に拠り、また彼の意見を検証しながら論を進めていくこととする。

⁶ Sabahattin Ali, *Bütün Öyküleri I*. Yapı Kredi Yayınları: İstanbul, 2002. (以下 Sabahattin Ali I) 及び Sabahattin Ali, *Bütün Öyküleri II*. Yapı Kredi Yayınları: İstanbul, 2002. (以下 Sabahattin Ali II)

⁷ Asım Bezirci, *Sabahattin Ali*. İstanbul: Çınar Yayınları, 1992. (以下 Bezirci)

2 サバハッティン・アリについて

2.1 生涯⁸

2.1.1 幼年期

サバハッティン・アリは、1907年2月25日、ブルガリアのギュムルジネ県アルディオ市に生まれた。父親はジンギル出身で歩兵隊長のセラハッティン・ベイだった。母親は、ヒュスニエ。

父親のアリ・セラハッティンは、1876年、イスタンブルで生まれた。1903年に歩兵隊士官となり、1906年、30歳の時にギュムルジネ県で士官友達であったメフメット・アリの14歳の妹ヒュスニエと結婚した。翌年、第一子としてサバハッティンが誕生している。ベズイルジによれば、アリ・セラハッティンは文学を愛する人物であり、また自由思想の持ち主でもあった。テヴフィク・フィクレットと友情を結び、思想文学雑誌も読んでいた。感情的で神経質な、細身の人物だったという。また母親のヒュスニエは怒りっぽい女性で、サバハッティンよりも弟のフィクレットをかわいがり、時にはサバハッティンを殴ることもあったという。こうした差別にサバハッティンは深く傷つき、そのため、父を慕っていたようだ。

父親のセラハッティンは、サバハッティンが幼少の頃エディルネに送られた。バルカン戦争で負傷し、退官した。その後はエドレミットに定住し、ムスリム地区でバックルを営んでいたが、第一次世界大戦が勃発すると再び軍隊に取られた。戒厳令区裁判長としてチャナッカレに配属されると、当時イスタンブルのウスキュダルに住んでいた家族も呼び寄せた。チャナッカレは当時戦火の中にあり、幼い子供二人を抱えたヒュスニエは、戦争の真っ只中で精神バランスを失ったという⁹。このためセラハッティンは母子をチャナッカレから遠ざけ、イズミルに移した。ところが、イズミルもまたギリシャからの攻撃を受けたため、家族はヒュスニエの両親のもとへと、エドレミットに移り住む。セラハッティンは、1918年に退職した。

2.1.2 学生時代

サバハッティン・アリは、7歳の時にイスタンブルのウスキュダルにある初等学校に入学する。家族がチャナッカレに移ると、チャナッカレ初等学校に転校した。第一次世界大戦が始まると、学校は教員不足により閉校となるが、父やほかの士官の尽力で再開された。また、トルコ語は父親から教わっていたという¹⁰。

1918年、エドレミットに移ると、今度はエドレミット初等学校に入学する。1921年に

⁸サバハッティン・アリの生涯については、Bezirci, pp.9-85 をもとにまとめた。

⁹Filiz Ali, *Filiz Hiç Üzülmesin*.İstanbul:Sel Yayıncılık, 1997, p.11. (以下 Filiz Ali)

¹⁰ Bezirci, p.11.

卒業し、1年後、バルケシル師範学校に入学する。この学校の二年生の時から、サバハッティン・アリは徐々に作品を発表し始めたという。1924年には、学校で友人と一緒に新聞を発行している。ベズイルジによればこの頃のサバハッティン・アリは、日記をつけ、小説を読み、機会を見つけては劇や映画を見るために学校を抜け出していた。

ところが、ある事件を境に学校から遠ざかるようになったという。1924年3月、サバハッティン・アリは女学校の秘密コンサートに行った。頭に布をかぶり、マントを羽織って学校を抜け出した。しかし、これを一人の生徒に告げ口され、退校処分を受けそうになった。サバハッティン・アリは自殺狂言を行い退校処分を免れるが、それでも学校に対する情熱は砕かれ、また何人かの不快な友人のため、耐えられなくなっていったという¹¹。イスタンブールに移り、そこで教育を受けたいと副校長につげ、イスタンブールの師範学校に入った。

1926年秋の終わりに、サバハッティン・アリが非常に愛し、尊敬していた父親が心臓病のために亡くなる。これをうけ、1926年11月「父へ」(Babam için)という詩を書いた。この詩は、翌年1月15日ギュネッシュ (Güneş) 誌に掲載された。

サバハッティン・アリの名は1925年から雑誌に出始め、27年までの間にセルヴェッティ・ヒュヌン (Servet-i Fünun)、ギュネッシュ (Güneş)、ハヤット (Hayat)、メシャレー (Meşale)、ウルマック (Irmak) などの雑誌に掲載された。

2.1.3 ドイツ留学と社会主義への傾倒

1927年、イスタンブール師範学校を卒業すると、職を求めてアンカラで医者をしていた叔父ファット・エルトゥズンのもとを訪ねた。この叔父の友人の紹介で、1927年10月1日付けでヨズガット共和国学校に就職した。ここで約1年間小学校教師を務めるかたわら、イスタンブールにある高等師範学校で‘違反生徒’として寝泊りをし、ペルテブ・ナイリ・ボルタブ¹²ら生徒たちと親しくしていたという¹³。

当時、国家教育省は外国語教師養成のためヨーロッパに学生を送っていた。サバハッティン・アリはこの試験を受け通過すると、1928年11月下旬トルコを離れドイツへと向かった。そこで4年間ドイツ語とドイツ文学を学び、帰国後は高校で働くことになっていた。しかしこのドイツ留学の時も、ドイツの学生と問題を起こし学業を修了しないまま1930年春にトルコに帰国せざるをえなくなったという¹⁴。

サバハッティン・アリは帰国すると、長い間イスタンブールの高等師範学校で寝泊りをした。そしてこの学校の校長ハミト・ベイの力を借りて、オルハネリ (ブルサ) の小学校教師に任ぜられた。1931年の新学期には、アイドゥン中等学校でドイツ語教師の職を与えられた。

1930年、レスィムリ・アイ (Resimli Ay) 誌に初の社会主義作品が掲載される。ベズイルジによれば、サバハッティン・アリはドイツ留学中、左派の行動を間近で目にし、おそ

¹¹ Bezirci, p.18.

¹² サバハッティン・アリの生涯の親友。1940年代に共産主義者として国外追放される。

¹³ Filiz Ali, p.16.

¹⁴ Bezirci, p.30.

らくいくつかの出版物にも注目していたと考えられる。その後トルコに帰国し、レスィムリ・アイ誌に関係していた進歩的知識人と知り合ってから、社会主義にどんどん傾倒していったという¹⁵。

この後サバハッティン・アリは文学活動を活発化させていくが、ここで、少し当時の文学の動きについて見ておきたい。共和国初期の文学界では、オスマン帝国期に政府高官の保護を受けながら活動した作家たちの作品が多数発表されていた。彼らの作品は新時代の特徴を伝え、政府のイデオロギーに対立することはなかった。一方で、共和国初期に育った作家たちや、それ以降同じ方向に進んだ作家たち¹⁶の作品は 1920 年代後半以降に発表されるようになっていく。こうした作家たちは共和国以前の作家たちとは立場を異にし、変化する時代の中に生きる新生トルコの人々を見つめ、社会に混在する問題を疑問視する形で扱った¹⁷。

レスィムリ・アイ誌は、こうした作家たちの思想文学活動の中心地となった雑誌の一つだった。創設者の一人、ゼケリーヤ・セルテルは、このレスィムリ・アイ誌について以下のように振り返っている。当時の政治状況の中で文学がどのような位置にあったかを見る上でも、非常に参考になる文章であるので、引用する¹⁸。

…1924 年末、イスタンブルでレスィムリ・アイという月刊誌を刊行した。当時はまだトルコで同種の雑誌はなく、他の雑誌は所有者の思想を広め、想像力を育てる目的で発行されていた。読者や国民、国民の生活や国民が求めているものに関わろうとはしていなかった。このため、雑誌は国民からは遠く高みに留まり、売り上げも 2,3 千部を超えることはなかった。技巧の面でも、文章の内容の面でも、読者に語りかけるものがなかったのだ。

レスィムリ・アイは、技巧面でも内容面でもトルコ初の雑誌だった。美しく色鮮やかな表紙の中に、内容豊かな文章を詰めて発行した。それまでの雑誌は、著名人の名に頼って生き延びようとしていた。だが私たちは、著名人の名を載せようとはしなかった。国民の社会生活に重きをおいて、文章内容が国民の生活や願いに関わっているかに注意を払った。

私たちの趣旨は、自由と民主主義だった。元アメリカ大統領アブラハム・リンカーンが言った言葉を、モットーにしたのだ。「国民の、国民のための、国民による政治」。民主主義のもっとも美しく、明確な定義はこれだった。私たちはこの民主主義を取り入れた。私たちの国で、独立戦争の後このような民主主義が実現することを願っていた。

しかし共和国が宣言されたにも関わらず、トルコに自由や民主主義がもたらされたことを示すものが何もなかった。国民は重要視されていなかった。独立戦争で流れた

¹⁵ Bezirci, p.31.

¹⁶ サドリ・エルテム、ベキル・ストック、サバハッティン・アリ、ケマル・ビルハシャル、オルハン・ケマル、アズィズ・ネシン、ファキル・ベイクルトなどが該当する。

¹⁷ Kurdakul, p.13.

¹⁸ Zekeriya Sertel, *Hatırladıklarım*. İstanbul: Gözlem Yayınları, 1977, pp.137-145.

血と失われた命は、忘れられていた。上位にいる者たちは、自分たちの支配を確立しようとしていた。国民は再び貧困の内に放り出された。政府はまず、新たな利益集団をつくり始めた。これら組織は政府の特権を利用して富を得ること以外何も考えていなかった。こうした進展は、独裁政権へ、ひどい政治に、そして国民の搾取につながっていく可能性があった。これと戦い、何にも増して国民の意思を、国民の利益を優先させる必要があった。レスィムリ・アイの刊行に際し私たちが選んだ道は、これだったのだ。

レスィムリ・アイは、創刊当初から大きな成功を収めた。それまでのどんな雑誌よりも売れ、幅広い読者層を得た。レスィムリ・アイは、思想、芸術関係者のみならず、すべての読者に知られた雑誌となった。内容のほとんどは、私の生涯の友サビーハ・セルテルと私が書いていた。外部からは、少ししか取り入れなかった。

(中略) 一方でレスィムリ・アイは、自由と民主主義への闘争が起こした反応に対応せねばならなかった。イスタンブールの出版界は、アンカラや、アタテュルクに対立し続けていた。このため出版は多かれ少なかれ監視されていた。すべてを口にし、自由に書くことは不可能だった。しかし私たちは持てる可能性の限りをつくして書こうと努力していた。国民の貧困を明らかにし、生活水準の向上、富裕層に対する貧困層の保護の必要性を訴えていた。

この文章からもわかるように、当時のトルコでは一党独裁体制の下で近代化が進む一方、厳しい言論統制が行われていた。一部の作家たち¹⁹は作品による投獄をうける。クドゥレットによれば、こうした不当な扱いが作家の経験を豊かにし、挑戦の機会を与え、結果作品のための豊富な材料を与えた。監獄は、彼らにとって社会観察の学校となったという²⁰。これはサバハッティン・アリにもあてはまり、この後何度も投獄され、その経験が作品に反映されていく。

最初に投獄されるのは、1931年のことである。アイドゥン中等学校で、生徒の引き出しの中からトルコ共産党の「紅いイスタンブール」(*Kızıl İstanbul*)という名の新聞が見つかり、生徒の一部によりサバハッティン・アリが破壊的プロパガンダを行ったことが告げられたためである。しかし密告が事実無根であることはすぐに証明され、裁判は無罪判決となった。

サバハッティン・アリは、この時の3ヶ月の拘留期間を無駄に過ごさず、アナトリアの人々と関係を築いたという²¹。これが、後のサバハッティン・アリの作品の主要テーマの一つとなる。

1931年コンヤ中等学校に配属となった。ドイツ語教師をするかわら、詩や短編を書き、そのうちいくつかを雑誌や新聞に投稿していたという。その中に、『クユジャック村のユースフ』(*Kuyucaklı Yusuf*)がある。クユジャック村のユースフは、コンヤのイエニアナドル(*Yeni Anadolu*)誌で15回ほど連載された。この長編小説は人気を博し新聞の売り上

¹⁹ ケマル・ターヒル、オルハン・ケマル、アズィズ・ネスィンなどが該当する。

²⁰ Kudret, pp.11-17

²¹ Bezirci, p.33.

げはあがったが、報酬が支払われなかったため連載は途中で打ち切りとなった。ベズイルジによると、新聞経営者はこのことにひどく腹を立て、サバハッティンを陥れた²²。その半年ほど前にサバハッティンがある集会で読み上げた「国からの便り」(Memleketten Haber) という詩を、アタテュルクを暗に非難するものだと報じた。これをうけ、サバハッティンは逮捕され、裁判の結果1年の懲役の判決を下される。

こうして1932年12月、サバハッティン・アリはコンヤの刑務所に入れられる。その約4ヶ月後には、シノップ刑務所に移された。この刑務所で味わった孤独や痛み、自由への切望は、短編小説「壁」(Duvar) や、「監獄の歌」(Hapishane Şarkısı) という詩に描かれている。

1933年10月、共和国10周年に発布された恩赦法により、サバハッティン・アリは釈放される。その後アンカラのルフアット叔父のもとに居候していた。無職であったサバハッティン・アリは教職に復帰しようとするが、起訴された経験を持つため公務員登録が消されていた。再び採用してもらおうと請願書を書き、国家教育省によって認められた。しかし、当時の国家教育相に心を入れ替えたことを証明するため、文章を書くことを要求された。そこでサバハッティンは、ヴァルルック (Varlık) 誌の1934年1月15号にアタテュルクへの愛を誓う詩を載せねばならなくなった。その後、国家教育長官アビディン・オズメンの時期に初めて出版局支部局長に任ぜられた。

1935年5月にアリエと結婚する。新居をアンカラに構えるが、2年後の1937年、兵役に呼ばれ、妻を連れてイスタンブルに移った。同年9月30日娘フィリズが誕生した。

2.1.4 弾圧と監獄生活

1938年、サバハッティン・アリは音楽師範学校のトルコ語教師に任命され、アンカラのカランフィル通りにあるアパートに移り住んだ。翌年、国立音楽学校でカール・エーベルトの助手に任命され、その後脚本家に昇進し、発声法の授業もしていた。仕事を非常に愛し、献身的に働いていたという²³。

この頃からサバハッティンの作品は次々と世に出され賞賛を受けるようになるが、その一方で多くの攻撃を受けるようになったという。1944年、サバハッティン・アリはニハル・アトスズ²⁴による度重なる中傷に対し、裁判を起こした。訴状には、「この中傷は私をただ国民の憎しみと敵意にさらすのみならず、同時に私の個人的職業的価値もゆるがす。」とあったという²⁵。初公判は4月26日、アンカラアスリエ第三裁判所で行われた。しかしこの裁判の日、民族主義者やトゥラン主義者による暴動が企てられ、裁判は中断した。また5月3日の第2公判でも、学生による暴動が起こった。最後の公判は5月9日に行われ、ニハル・アトスズには有罪の判決が下った。その後、民族主義者やトゥラン主義者の

²² Bezirci, p.35.

²³ Bezirci, p.57.

²⁴ サバハッティン・アリの古くからの友人。サバハッティン・アリの長編小説『我々のうちにひそむ悪魔』(1939)を、民族主義者とトゥラン主義者を暗に非難するものであると非難、サバハッティン・アリ個人に対する中傷も行なった。

²⁵ Bezirci, p.62.

取り締まりが行われ、何人かは逮捕された。当時の大統領イスメット・イノニョも、5月19日の声明でこの事件について言及し、「理不尽で良心のない陰謀者たちの悪意に満ちた扇動にトルコ国民の運命を握らせないために、しかるべく共和国の方策を講ずる。」と述べた。

しかし、サバハッティン・アリに対する攻撃は 끝나지 않고、音楽学校の仕事 を辞めざるをえなくなった。イスタンブルで新聞社を始め、1945年12月1日にはジャミル・バイクルトとイェニ・ドゥンヤ (*Yeni Dünya*) 誌を作り、政治小話を書いた。しかしこの新聞社は、共和人民党によって企てられた12月4日の暴動で本社も印刷所も襲われ、破壊された。その後サバハッティン・アリは再び失業するが、トルコ社会主義党の組織であるゲルチェック (*Gerçek*) 誌で記事を書き、その後アズィズ・ネシン、ルフアット・ウルガズとマルコ・パシャ (*Marko Paşa*) をはじめ、数々の新聞を発行した。

マルコ・パシャ紙は、1946年11月25日に創刊し、社会主義政治を題材にした初の風刺紙として大きな関心を持って迎えられた。しかし第4号に載った記事が原因で政府によって回収された。この記事はアズィズ・ネシンによるものだったが、署名がなかったため新聞経営責任者であるサバハッティン・アリが拘留され、17日後に釈放された。その後、第19号に掲載された「君が言ったこと」 (*Dediğin*) という詩のため1947年5月16日、新聞は閉刊させられた。5月26日、サバハッティン・アリはメルフム・パシャ (*Merhum Paşa*) という新しい新聞を発行した。

この後、サバハッティン・アリはマルコ・パシャ紙に掲載した記事や、その他様々な新聞に載せた短編を理由に多方面から裁判を起こされる。そして1947年5月28日拘留された。長い間警察に拘留され、最初はスルタンアフメット、続いてウスキュダル・パシャカプスで3ヶ月拘留された。ウスキュダルでは、行動や会話が監視されていたという。当時のことについて、娘フィリズ・アリは次のように述べている。

…父を訪ねてパシャカプス刑務所にどうやって行ったのか、全く覚えていない。刑務所の中庭で、3人で一緒に撮った2枚の写真を見るたび、心がひどくねじれて痛む。父の髪は真っ白になり、明らかに何キロも体重が落ちていた。私の、あの丸々とした父は、白いリネンからこぼれ落ちてしまったかのようにだった。サビーハ・セルテルとゼケリーヤ・セルテルの回想を読んで、なぜ当時を思い出したくなるのか、今はよくわかる。父は私たちを看守長の部屋で迎え、私を抱くとキスをして、臭いをかいで、泣いているようだった。私の子供時代のたった一人の英雄、世界でただ一人憧れていた人が涙を流している。囚われの鳥のように鉄柵の中に閉じ込められている。髪が真っ白になり、やせてしまった。こうしたことが、私にどんなにか影響したことだろう。その夏私は、完全なる想像の世界に生き始めた²⁶。

サバハッティン・アリは、同年9月に釈放されるとアズィズ・ネシンとともに新しくアリババ (*Alibaba*) という風刺新聞を準備し始め、11月に刊行する。しかしこの新聞も紙や

²⁶ Filiz Ali, p.111.

印刷、販売に関する障害があり 1 ヶ月で閉刊してしまった²⁷。さらには、メルフム・パシヤの 26 号に載った「裁判所の廊下で」(Mahkeme Koridorlarda) という記事のために再び別の罪で調査が行われ、11 月 14 日に逮捕が決定する。12 月 20 日に逮捕され、10 日後の初公判で無罪となった。

2.1.5 亡命と最期

この後のサバハッティン・アリは、無職で書く場所も見つけることができず、最後には亡命を決意した²⁸。監獄で知り合ったハサン・トゥラルを訪ね、亡命の仲介人アリ・エルテキンを紹介された。アリ・エルテキンは、ユーゴスラヴィアの家庭の出身で、1906 年に生まれ、1925 年トルコに移り住んだ。

サバハッティン・アリは、この頃運送業を始めていた。ベズイルジによれば、亡命を計画した 1948 年 3 月 28 日も、エディルネにチーズを届けると言って出発したという²⁹。これに関して、フィリズ・アリは次のように回想している。

…父の状況は深刻なままだった。もう身動きが取れなくなっていた。新聞を発行することは不可能であり、判決済みもしくはこれから判決が行われる裁判のことがあった。つまり、無職で、自由はすぐにでも奪われてしまうかのように手も足も縛られようとしていた。最後の手段は海外に行くこと。しかし、パスポートを取ることができなかった。最後にはたった一つの道が残ったが、それは逃げることだった。
(中略)

1948 年 2 月、父はアンカラにやって来た。私は最初彼が分らなかった。毛皮つきの革ジャケットをはおり、頭には毛皮つきの耳あてがついた皮帽子、足には底の厚いブーツを身につけて、完全に旅の装備をしていた。父は新しい役を楽しんでいるようだった。(中略) 私は、父と一緒にいることができ、飛ぶようだった。新たな冒険が始まるのだと思い、とても幸せだった。父は皮ジャケットとカルパック帽を私に着せて、写真を撮っていた。そして、ウルファ方面にものを運ぶと行って出発した。父に二度と会うことはないなどと、どうして知ることができただろう³⁰？

その後、ブルガリア国境近くの村付近の谷で、サバハッティン・アリは、アリ・エルテキンによって殺害されたという。死体は、1948 年 6 月 18 日、羊飼いににより発見された。アリ・エルテキンは尋問官に対し国民的感情に駆られこの殺人を犯したと語ったという。

ベズイルジによれば、サバハッティン・アリが本当にエルテキンによって殺害されたかどうかは確かではない。エルテキンが殺害したのか、それとも他の者が罪をエルテキンに着せようとしたのか、その他の者とは誰なのか、エルテキンの事件における役割とは何で

²⁷ Bezirci, p.70.

²⁸ Bezirci, p.72.

²⁹ Bezirci, p.75.

³⁰ Filiz Ali, pp.114-115.

あったのか等、様々な議論が行われた。

ベズイルジは著書の中で、サバハッティン・アリの親友ラシフ・ヌーリ・イレリによって最初に唱えられ、1990年の研究者ウウル・ムムジュの発表で支持された説を紹介している³¹。それによれば、サバハッティン・アリはブルガリア国境では殺害されず、その後国防省によって捕らえられ、拷問の最中に死んだ。この殺人はサバハッティン・アリと共に亡命をはかった2人の人物を捕らえるために隠蔽されたという。死体は国境付近に捨てられ、腐り、村人に発見された。亡命を図った2人の人物が捕まらなかったため、国防省のスパイであったアリ・エルテキンが罪を着せられたという。

1948年12月28日、アリ・エルテキンは逮捕された。裁判の結果、4年の懲役を受けたが、同年恩赦法により釈放された。

以上、サバハッティン・アリの生涯を概観した。波乱万丈の生涯の中で、サバハッティン・アリという人物は何を考え、どんな行動をしていたのだろうか。次に、彼の人物像を知る上で有用と思われるいくつかの性質を取り上げながら、サバハッティン・アリという人物について考える。

2.2 人物像

2.2.1 幼少時代～学生時代

ベズイルジによれば、幼少時代のサバハッティン・アリは、白い肌、ハシバミ色の瞳、ふわふわの髪の毛をした美しい少年だった。エドレミットの隣人たちは、彼を「朝の星」と呼んだという。道端で子供たちの遊びに加わることもなく、控えめな少年であったようだ³²。また、エドレミットの初等学校では優等生で、非常に賢く勤勉だったという。また、読書を好み、おじや近所の人たちに与えられた本を夢中になって読んでいたようだ³³。

エドレミット初等学校卒業後のバルケシル師範学校でも、優秀な成績をおさめていたようだ。当時の親友ナジ・エルジェビクは、こう振り返っている。

…教室では隣の席に座った。サバハッティンは、男らしく、賢く、誠実で細身の誇り高い友人だった。あまり勉強はせず、先生の話聞くだけですませていた。それでもテストではいつもよい点をとっていた。小説を読むのが好きで、読書時間には後ろの列に下がってかぼちゃの種を食べながら様々な小説をむさぼるように読んでいた。2年生の時には、創作も始めた。処女作品は短編だった³⁴。

その後転校したイスタンブル師範学校でもクラスで一番賢く勤勉な生徒であったという。

³¹ Bezirci, pp.84-85.

³² Bezirci, p.13.

³³ Bezirci, p.14.

³⁴ Bezirci, p.16.

詩人で小説家のアリ・ジャニプが、当時この学校で文学教師をしていた。ベズイルジによれば、サバハッティン・アリは機会を見つけてはジャニプと学校の泉の側で話をした。サバハッティン・アリが文章を書くことにこの頃から情熱を傾けていたことをうかがわせる逸話がある。

ある時、サバハッティン・アリが、

「先生、美しい文章はどうしたら書けるでしょう？」

と尋ねたという。するとジャニプは微笑んで、

「たくさん読書をしなさい。たくさんたくさん読むことだ。」

と答えたという。ジャニプはその一週間後、ハヤット (*Hayat*) 誌に「文学好きのある青年への手紙」という作品を載せている³⁵。

この頃、サバハッティン・アリの父親が亡くなった。フィリズ・アリによれば、この後サバハッティン・アリは自動的に家長の役を務めることとなり、死ぬまで家族の面倒を見た。刑務所にいても、無職の時でも、拘留されても母親に月々の仕送りを欠かすことはなかった。サバハッティン・アリが送れない時は、友がすぐに代わり、母親に貧しい思いをさせることはなかったという³⁶。サバハッティン・アリは当時のことを次のように振り返っている。

…師範学校の五年に進級した時の休暇で、母は完全におかしくなった。とうとう父は母をイスタンブルに連れて行き、フランス病院に入院させた。6ヶ月の入院を経て退院したが、完全に回復したわけではなかった。父は毎日6リラの治療費を払えなくなった。アンカラにいる母の兄弟が好意を示してゼイネップ・キャーミル病院に無料で入院させてくれた。弟は学校を卒業できなかった。(中略)すでに、彼も父のやっかいの種になっていた。だが父は末の妹スヘルヤにも同時に母の役割をしてやっていた。あの小さな娘に母がいらないことを感じさせたくなかったのだ。しかし彼も人間だった。特に心臓に欠陥のある半分の人間。これほどまでのことに耐えられなかった。15分の発作の後、どんな風に亡くなったかは話したとおりだ。(中略)哀れな父。8年間も私たちのために、ただ私たちのためだけに、聖人すらも耐えかねるだろうことを耐え忍んだにもかかわらず、これらすべての源であった妻の回復した姿を見ずになくなってしまった³⁷。

2.2.2 読書

サバハッティン・アリが幼少のころから非常な読書家であったことは前述の通りであるが、それは生涯変わらなかったようだ。

フィリズ・アリは著書で、サバハッティン・アリの読書好きについて多くの箇所で言及している。

³⁵ Bezirci, p.18.

³⁶ Filiz Ali, p.16.

³⁷ Bezirci, p.19.

…本を読むことは、私の父が一日のどの時間にも、あらゆる条件の中で、どんな場所でも行うことのできる作業だった。本を読んでいる時、または何かを書いているときは、側でボールが弾けたとしても、びくとしなかっただろう。立ち止まっている時、歩いている時、バスで、トイレで、思いつく全ての場所で彼が手に抱えた本に埋もれているのを目にすることができただろう³⁸。

サバハッティン・アリは、ドイツ留学から帰国した時、大量の本を持ち帰ったようだ。このことについても、フィリズ・アリは以下のように言及している。

…父は、ドイツからトルコに大量の本を持って帰ってきた。母は、父の本についての驚きを今でも事あるたび口にする。イスタンブールで入籍しアンカラの新居に越した時、母を最も驚かせたのは、二部屋しかない家の一部屋が丸ごと本に充てられたことだった。

サバハッティン・アリは、ドイツ留学中もドイツ文学からドイツ語を習得していったという³⁹。このようにして読書によって学び、ドイツ語以外にも豊富な知識を得ていたようだ。1940年代のアンカラでサバハッティン・アリの仕事仲間であったエロル・ギュネイは次のように振り返っている。

…サバハッティン・アリとは 1940 年代初頭、国家教育省の翻訳部署で知り合いました。彼はこの部署の翻訳者の一人で、トルコ語に翻訳する古典の選択と、翻訳の校閲も担当していました。ドイツ語を中心に仕事をしていました。サバハッティンは、ドイツ語についてとてもよく知っていました。私を最も驚かせたのは、専門家しか知らないような作品や他の世界文学について彼が豊富な知識を持っていたことです。読むことをやめず、読んだものを消化する人でした。どう読むべきか、何が読むのに値するかを知っているようでした。彼の頭はいつも何かを捜し求めていました⁴⁰。

また、語学や文学の知識以外にも、サバハッティン・アリが本から思想的影響を受けたことも、アリの以下の言及から考えられる。

…ドイツからの帰国の時に父が持ち帰った大量の本の中には、世界文学の傑作のほかにも、カール・マルクス⁴¹、エンゲルス⁴²、カウツキー⁴³、レーニン⁴⁴、ベルンシュタ

³⁸ Filiz Ali, p.52.

³⁹ Filiz Ali, p.23.

⁴⁰ Filiz Ali, p.52.

⁴¹ ドイツの経済学者・哲学者・革命家。1840年代中頃、エンゲルスとともにドイツ観念論、初期社会主義および古典経済学を批判的に摂取して科学的社会主義の立場を創始。資本主義体制を批判し、終生国際的社会主義運動のために尽くした。

⁴² ドイツの思想家・革命家。マルクスとともにマルクス主義の創始者。

⁴³ ドイツ社会民主党、第二インターナショナル指導者の一人。マルクス主義思想の普及に

イン⁴⁵、ローサ・ルクセンブルグ⁴⁶などの政治家の著書があった⁴⁷。

2.2.3 交友関係

フィリズ・アリは著書で、「父の読書好きの思い出から、父が始終本を読み、全く話をしない人物であったと思わないで欲しい。」と述べている⁴⁸。実際、サバハッティン・アリについて語られる時、その交友関係の幅広さは目を引く。この交友関係の広さは、サバハッティン・アリの知識の豊富さ、話し好きで頭の回転の速い性格によるところが大きいようだ⁴⁹。彼の友人の一人メディハ・エセネルは次のように言っている。

…サバハッティンと会話のやりとりをすることは不可能だった。つまり、彼がいる所ではいつも彼が話をし、私たちは聞き役だった。大げさな人たちは、彼のこうした癖に腹を立てていた。でも私はちっとも気にならなかった。私にとってサバハッティンは、彼がいる場所をいつも愉快にしてくれる性格の持ち主だった。よくドアから爆弾のように入ってきては、ひどいことをしたものだ。彼の当意即妙な返答は見事だった。相手がどれだけ準備をしても、負かされたところを私は見たことがなかった。彼の冗談、いたずら、知恵は驚くほどだった⁵⁰。

ベズイルジによれば、サバハッティン・アリは生き生きと行動的、物まね上手で冗談を言う側面も持っていたという⁵¹。広い交友関係では左派や右派などの区別をせず、大臣や商人、弁護士から地方検察官、作家から警官まで様々な人々と付き合った。アリによれば、サバハッティン・アリは社会の両端の人々にそれぞれ興味深い点があると考え、周囲に等しく振舞っていたようだ⁵²。メディハ・エセネルは次のように述べている。

…彼の交友関係はとても広がった。どこにでも入り浸って気が合おうが合うまいが誰とでも仲良くなり熾烈な議論を繰り広げていた。なぜだったのだろうか？おそらく性質だったのだろう。あれだけの知恵を持ちながら、彼の子供らしさというのはおそらく彼が純粋で、人間全てを愛し、頼り、信頼していたためだろう。（中略）誰に対しても面と向かって反論したので、右派の人間からも左派の人間からも当時の人民党党员

努める。

⁴⁴ ロシアのマルクス主義者。

⁴⁵ ドイツの社会主義者。社会民主党員。暴力革命を否定し、漸進的な社会主義化を提唱し、修正主義として批判された。

⁴⁶ ポーランド生まれの女性社会主義者・経済学者。

⁴⁷ Filiz Ali, pp.22-23.

⁴⁸ Filiz Ali, p.54.

⁴⁹ Filiz Ali, p.59.

⁵⁰ Filiz Ali, p.54.

⁵¹ Bezirci, p.74.

⁵² Bezirci, p.59.

からも危険人物とみなされていた⁵³。

1940年代に暮らしたアンカラでは、改革の有力者たちが集まるレストランやカジノに足を運び、親しくしていたという。こうした行動は、仲間内でも非難の対象となったようだ。しかしこうしたサバハッティン・アリの行為に、妻アリエは少々異なった解釈を加えている。

…サバハッティンは、歩き回って楽しい時を過ごすのを好んでいました。でもそれ以上に、こうした場所で人々と知り合い、彼らの行動を観察し、話し方を研究し、弱点をつかむことを目的としていました。作品の材料を集めるためというのもあったでしょう。こうした人々をからかっていた部分もありました。彼らを観察して楽しみ、美学という点では美しい女性を見て喜んでいました⁵⁴。

サバハッティン・アリ自身は、1933年シノップ刑務所から親友アイシェ・ストックに宛てた手紙の中で次のように話している。こうした考え方が、分け隔てなく人々と関係を築いたサバハッティン・アリの性格に影響していると考えすることはできないだろうか。

…僕は人生で誰に対しても「君はこうだ、ああだ。」と決めつけたことがない。君はそうこう考えているねと判断を下したりしなかった。僕は人間というものをよく知っていると言い切れるが、彼らに対して判断を下すことは避けている。これを奇妙に思う人もいる。だが僕はとてもよく知っているのだ。今こうである人が、しばらく経って同じように本気で違う様になりうる。今日考えていることと反対の考えを明日はしているかもしれない。僕がこの世で良いとか悪いなどと人を分類しない理由もこれだ。今日僕の隣に本当に素晴らしく、善良で思いやりのある人間がいるとして、彼がもし明日君の前に追いはぎとなって現れたら、時間と環境の変化で5リラのために人をも殺せるようになるかもしれない⁵⁵。

2.2.4 ドイツ留学の影響

フィリズ・アリは、サバハッティン・アリのドイツ留学について「父は、ドイツに1年半という短期間しか滞在しなかった。それでも一生分の情報を得、観察をし、文化をスポンジのように吸収してきた⁵⁶。」と述べている。このことからわかるように、ドイツ留学がその後のサバハッティン・アリに与えた影響は大きい。

例えばそれは、娘フィリズの養育に色濃く反映されている。サバハッティン・アリから

⁵³ Filiz Ali, p.59.

⁵⁴ Filiz Ali, p.62.

⁵⁵ Ayşe Sıtkı İlhan- Doğan Akın, *İki Gözüm Ayşe*. Ankara: Bilgi Yayınevi, 1997, p.137. (以下 İlhan-Akın とする。)

⁵⁶ Filiz Ali, p.21.

受けた教育をフィリズ・アリは次のように回想している。

…父はあらゆる物事に対しそうであったように、子を持つ者として子育てにも論理的であろうとした。私が生まれる前から、ドイツ人のように育てることが議論もなしに決められてさえいた。母はドイツの病院で出産をし、私の運命を決めた。父はドイツの養育本を母に見せ、子育てにおいてどれほど科学的であるべきか教えていた。食事、つまり果物、野菜、肉に関しても父の信頼していたアリ・シュキユル医師の監督のもとで用意されていた。この食事の問題は父と私のただ一つの確執だった。(中略) 食欲がなく偏食の子供がすぐに病気にかかってしまうことを恐れ、父は私がほんのわずかな微熱を出しただけでカランフィル通りに住むドイツ人医師エックシュタイン先生を家に呼んだ。エックシュタイン先生は、父の大げさなパニックを見て、ある時“家にある体温計を全て捨て、二度とフィリズの熱を測らないように”勧めた。私はこのことを昨日のこのように覚えている⁵⁷。

…食事以外のことで父と分かり合えないことはなかった。ドイツ式教育は奇妙だったが、嫌だと思ったことはなかった。ドイツの子供たちのように夜は早く寝て、夜でも昼でも一人で留守番ができた。おもちゃで遊んだり、本や雑誌を読んだりして一人で楽しむことができた。大人の会話には混じらず、甘えたりもしない。ただ質問をされた時は、大人のように振舞って答えるようにとしつけられていた。

私の本に対する関心の源も父だった。父のお陰でまだ読み書きを覚えないうちから、グリム兄弟、デデ・コルクットの民話、ドイツ文学の主要作品の要旨を熟知していた⁵⁸。

また、ドイツ留学の思想面への影響も考えられるだろう。サバハッティン・アリは 1930 年春にトルコに帰国するが、同年秋には初の社会主義リアリズム作品である「森の話」(*Bir Orman Hikayesi*)と、「ある船乗りの話」(*Bir Gemcinin Hikayesi*)の 2 作を発表している。この短編を発表したレスィムリ・アイ誌(*Resimli Ay*)で進歩的知識人と出会い、社会主義への傾倒を深めていったことは前述の通りである。ゼケリーヤ・セルテルは、著書で当時をこう振り返っている。

…1930 年代、サバハッティン・アリはドイツ留学から帰ってきた。イスタンブルに来ると真っ先にレスィムリ・アイにやってきて、私たちと知り合いになった。背が低く、金髪で感じのいい青年だった。(中略) すぐに私たちは彼を好きになった。とても賢く、元気で、いつも動き回っている男だった。彼と知り合って好きにならずにはいられなかった。印刷所にはいつも本を片手にやってきた。当時最も好んで読んでいたのはドイツの大詩人ゲーテ⁵⁹とトマス・マン⁶⁰だった。いつも彼らの作品を持ち歩いていた。ナ

⁵⁷ Filiz Ali, p.44-46.

⁵⁸ Filiz Ali, p.47.

⁵⁹ ドイツの作家。疾風怒濤期の代表者。

⁶⁰ ドイツの小説家。ナチス時代アメリカに亡命し、戦後はスイスに移住。リアリズム小説

ーズム・ヒクメットはこの若者に新しく大きな原石を見出し、サバハッティンの恩恵をうけつつ彼を芸術界で養育し始めた⁶¹。

サバハッティン・アリのドイツでの生活についての詳しい記録は多くない。しかしベズイルジによれば、サバハッティン・アリはトルコからドイツに向かう途中の駅でアプトン・シンクレアの『石油』⁶²を買い、この小説を読み終えたとき社会主義に親しみを覚え始めたという⁶³。また、ドイツ滞在中に左派の行動を近くで見ていたという。ゼケリーヤ・セルテルの回想からも、ドイツ留学をきっかけにサバハッティン・アリが社会主義へと傾いていき、トルコ帰国後もその道を進んでいったと考えることができるだろう。

ここまで、サバハッティン・アリの人物像を知る手がかりとなる記録をもとに、サバハッティン・アリがどういう人間であったのかを見てきた。まとめるならば、勤勉で、読書家でありながらも、人々と話し、関わることを好む人物であり、そうした性格が彼の作品の材料集めに役立っていたとすることができるだろう。また、ドイツ留学が彼に強い影響を残し、それは彼の私生活から思想にまで及んでいたということもわかった。続いて、サバハッティン・アリの作品を見ることにする。

2.3 作品について

サバハッティン・アリは短編作家としてよく知られている⁶⁴が、詩に始まり、短編、長編小説、脚本と、様々な作品を残した。舞台の脚本も書いている。

ここでは、サバハッティン・アリの作品について概観したい。

2.3.1 詩

サバハッティン・アリの作家としての出発点は、詩であった。1934年に、『山と風』(*Dağlar ve Rüzgar*)という詩集を出版している。詩集はこの一冊のみにとどまるが、サバハッティンはこれについて、親友アイシェに、『山と風』という詩集が出る。ペルテブが出すと言って聞かなかった。僕は自分の詩が本になってもよくないと分かっているのに⁶⁵。」とこぼしている。さらに出版された後も、次のように述べている。

…僕はこれらの詩を本にするべきではなかった。出版してもいいことにはならなかったのに。他人の意見はとりあえず、これらの詩にどれだけの値打ちがあるかは僕が誰

から出発したが晩年は神話的素材を取り上げた。ヒューマニズムの立場から民主主義擁護の姿勢を貫く。

⁶¹ Sertel, p.276.

⁶² アメリカの作家 (1878-1968)。社会主義的な作品を書き続け、政治運動にも参加。

⁶³ Bezirci, p.26.

⁶⁴ Bezirci, p.89.

⁶⁵ İlhan-Akın, p.179.

よりもよくわかっている。仮初めの僕の姿の一部をこの詩に見出したとしても、現実のサバハッティン・アリとこれらの詩との間につながりが見出せない。今はこのことを君以外の人に知ってもらう必要はない⁶⁶。

こうした発言からも分るように、サバハッティン・アリにとって詩とは未完成の分野であった。このことを反映する事実として、1935年から1948年まで、一作も詩を残していない。

2.3.2 長編小説

サバハッティン・アリは、3作の小説を残している。

『クユジャック村のユースフ』(*Kuyucaklı Yusuf*)、『我々のうちにひそむ悪魔』(*İçimizdeki şeytan*)、『毛皮マントのマドンナ』(*Kürk Mantolu Madonna*)である。

この3作のうち、初の、そして代表作とも言うべき小説は『クユジャック村のユースフ』(*Kuyucaklı Yusuf*)である。ベズィルジによれば、この作品は1931年夏から1932年夏の間に書かれ始めたと考えられている。当初はこの作品を第一部とした三部作を構想していたというが、この作品で終わっている⁶⁷。ベルナ・モランは、著書でこの小説の二つの特徴について触れている。一つは、トルコが抱える問題に対するサバハッティン・アリの見解の相違である。社会構造、抑圧された民衆、農村階級の状況を取り上げた小説は1950年以降に見られるようになったというが、モランは『クユジャック村のユースフ』をそうした小説の初の成功例と位置づけている。また、同時にアナトリアをも取り上げたことがさらなる重要性を付与すると述べている⁶⁸。

2.3.3 短編小説

サバハッティン・アリの短編小説については5冊の本が出版されている。本論ではこれら短編小説を扱う。詳細については次の章で述べることにして、ここでは作品の題名と出版年を表記する。

『水車』(*Değirmen*) (1935)

「水車」(*Değirmen*) (1929)

「報われない傑作」(*Kurtarılamayan Şaheser*) (1929)

「ツバメ」(*Kırlangıçlar*) (1933)

「チェロ」(*Viyolonsel*) (1928)

⁶⁶ İlhan Akın, pp.196-197.

⁶⁷ Bezirci, pp.193-194.

⁶⁸ Berna Moran, *Türk Romanına Eleştirel bir Bakış*. İstanbul: İletişim Yayıncılık, 1996, p.17.

「ふいに消えるランプの話」(Birdenbire sönen Kandilin Hikayesi) (1929)
「ある若者の話」(Bir delikanlının Hikayesi) (1930)
「ある船乗りの話」(Bir Gemici Hikayesi) (1930)
「ある森の話」(Bir Orman Hikayesi) (1930)
「かも」(Kazlar) (1933)
「逃走」(Bir Firar) (1933)
「水路」(Kanal) (1934)
「憲兵のベキル」(Candarma Bekir) (1934)
「酔っ払い」(Sarhoş) (1933)
「殺人のわけ」(Bir Cinayetin Sebebi) (1927)
「黒いフランネルのために」(Bir Siyah Fanila için) (1927)
「おかしい町」(Komiki şehir) (1928)

『牛のひく荷車』(*Kağnı*) (1936)

「牛のひく荷車」(Kağnı) (1935)
「トラック」(Kamyon) (1935)
「身分証」(Kafa Kağıdı) (1935)
「蓄音機の女」(Gramfon Avrat) (1935),
「アラップ・ハイリ」(Arap Hayri) (1935)
「冗談」(Bir Şaka) (1935)
「壁」(Duvar) (1936)
「市場の商人」(Pazarcı) (1935)
「アパート」(Apartman) (1935)
「車 5 クルシュ」(Arabalar Beş Kuruşa) (1935)
「思想の友」(Fikir Arkadaşı) (1935)
「敵」(Düşman) (1935)
「スキャンダル」(Bir Skandal) (1932)

『声』(*Ses*) (1937)

「声」(Ses) (1937)
「犬」(Köpek) (1937)
「お湯」(Sıcak Su) (1936)
「月明かりの夜」(Mehtaplı Bir Gece) (1937)
「ミス・キョステンジェ」(Köstence Güzellik Kraliçesi) (1936)

『イエニ・ドゥンヤ (新しい世界)』(*Yeni Dünya*) (1943)

「アスファルトの道」(Asfalt Yol) (1936)
「女給メレッキ」(Hanende Melek) (1937)
「チャイダンルック (二段式急須)」(Çaydanlık) (1938)
「アイラン」(Ayrılan) (1938)
「温めようと」(Isıtmak için) (1939)
「眠気」(Uyku) (1939)
「よろしく」(Selam) (1940)
「ある仕事のはじめ」(Bir Mesleğin Başlangıcı) (1940)
「集会」(Bir Konferans) (1941)
「新しい世界」(Yeni Dünya) (1942)
「二人の女」(İki Kadın) (1942)
「キニーネ硫酸塩」(Sulfata) (1942)
「ハサンは溺れ死んだ」(Hasan boğuldu) (1942)

『ガラスの屋敷』(*Sırça Köşk*)(1947)

「オレンジ」(Portakal) (1944)
「白い船」(Beyaz Bir Gemi) (1945)
「殺人者オスマン」(Katil Osman) (1945)
「腎臓」(Böbrek) (1945)
「タバコ」(Cıgara) (1945)
「国民は飲み込まない」(Millet Yutmuyor) (1945)
「幸運な犬」(Bahtiyar Köpek) (1946)
「しみ」(Çilli) (1947)
「網膜剥離」(Dekolman) (1947)
「権利をあきらめるな」(Hakkımızı Yedirmeyiz) (1947)
「救命者」(Cankurtaran) (1947)
「狼と羊」(Kurtla Kuzu) (1947)
「ある恋の物語」(Bir Aşk Masalı) (1946)
「巨人の死」(Devlerin ölümü) (1946)
「羊の物語」(Koyun Masalı) (1946)
「ガラスの屋敷」(*Sırça Köşk*) (1945)

3 短編作品について

ここでは、サバハッティン・アリの短編作品について概観する。サバハッティン・アリの短編作品の大きな特徴の一つとして、作風の変遷があげられる。この作風の変遷はなぜ起こったのか、短編作品を見ながらその理由も考えていきたい。

3.1 文章

一人の作家の作品というのは、作家自身の内面の変化、またその作家が生きる歴史的状況の変化にも影響を受けると言えるであろう。サバハッティン・アリの時代を追うごとに大きく変化していく作風に、サバハッティン・アリ自身の内面の変化、歴史的状況は影響していたのであろうか。このことを考えるためには、作家がどういった姿勢で文章を書くという行為に臨んでいたかを知る必要があると考えられる。このことについて、サバハッティン・アリが親友アイシェ・ストックに宛てた手紙の中の以下の発言から考えてみる。

…この世界で僕が全精力を注ぐただ一つの分野、それは文章を書くことだ。このことで僕を上回る者は少ない。どこにしようと、いつであろうと文章を書くことができる。寒さ、暑さ、安心、不安、悲しみ、喜び、静寂、騒音。何であろうと僕が文章を書く邪魔をする事はできない。文章を書いているとき、僕は書いているものと完全に一体となって生きている。自分にぴったりの、完璧な現実の世界で生きているのだ。ところが、全ての問題はここから生じてしまう。僕は文章や本の中の世界を、僕を取り巻く世界よりも現実的に感じている。どうしたらいい、アイシェ。脳の力を日常生活で使うことを僕は軽視していた。本当を言えば、このことを後悔もしていない。いつもこのおかげで痛みを味わっているというのに…⁶⁹

…僕は元からどういうわけか自分の作品で直接もしくは間接的にでもいつも自分のことについて語る。自分で自分のことをとても気に入っているみたいだ。でも不満ではない。なぜなら僕の考えでは“天才”はある種の誇大妄想癖をもっていて、才能ある者の中で最も馬鹿馬鹿しいのは謙虚な者だからだ。実際のところ謙虚な天才はいないが、だいたい得点を稼ごうとして時々へり下ってみたりする。作品で自分について語らない者たちは、自分に自信がない臆病者の弱虫だ。もしくは語るべき物を持たない空の人間だ。僕は臆病ではないし自分を信じている。それに、100 作の作品で 100 種の登場人物をつくったとしてもその一人一人に自分の一部を与えられるほど満たされている。しかもこの 100 人は全員強い。なぜなら僕は僕の中で大勢の人間が同時に同様の強さを持って生きているのを感じている。時にはこれほど入り組んだ性格の中に本当の自分を見出すのが難しいこともある。むしろ見つけられないのだ。これらはすべていろいろな時と場所で僕の中に現れるが、どれも僕の真実で本物の性格なのだ

⁶⁹İlhan Akın, p.119

以上の発言から、サバハッティン・アリが内面に起こる変化を作品に如実に反映させていたであろうこと、もしくは無意識のうちに自分のことについて語るうちに反映されていたであろうことが考えられる。歴史的状況の影響を受けたかについても、肯定できると考える。なぜなら当時のトルコの歴史的背景と、サバハッティン・アリの作風の変遷は重なる点がある。次の項で、作風の変遷と照らし合わせながら具体的に見ていきたい。

3.2 作風の変遷

サバハッティン・アリの作品は、初期にはロマン主義的傾向、その後は社会主義リアリズムの傾向を帯び、発展していく。ここでは、短編作品を時系列的に追いながら、作風の変化を見ていく。

3.2.1 ロマン主義からリアリズムへ

サバハッティン・アリの初の短編集、『水車』の中には1926年から1929年の間に書かれた作品が収められている。まず、サバハッティン・アリ自身のこの作品に対する言葉を見てみる。

…僕はこのところ、今度出る本のことでとても忙しくしている。2日に1度は変更修正が送られてくる。半日がかりでやっている。一部の短編は、出版すると危険だ。僕はこれに気がつくやうと、手紙で議論を始めるが、最後には折れて何箇所か書き直さなければならなくなる。本には16作品収められる。三部に分かれていて、第一部にはロマン主義の作品だけが入っている。第二部はより実生活に近い、直接人生経験から得た作品だ。第三部は7, 8年前に書いた古い短編だ。僕としては、一番重要なのは第二部だ。だが、一番削除されているのもこの部分なのだ⁷¹。

この短編集に収められた作品の主題は、最後の2つを除いて恋であり、そのほとんどが悲劇に終わる。人物の行動描写を圧倒する自然描写に、感情豊かで華美な語りと美しい言葉遣いが特徴的である。当時の雑誌短編に特有の空想的、民話的要素を含んだ現実離れした内容が語られている⁷²。

また、ドイツロマン主義や、一部の社会主義作家らの影響が見られるという⁷³。そしてサバハッティン・アリ自身も、これを認める発言をしている。

⁷⁰ İlhan-Akın, p.136

⁷¹ İlhan-Akın, p.264.

⁷² Bezirci, p.94.

⁷³ Bezirci, p.177.

…ゴーリキー⁷⁴の作品をそれほど読んだわけではないが、彼の短編が僕の「水車」という短編に似ていると言われている。あるいはそうかもしれない。なぜなら「水車」を書く一月ほど前にゴーリキーの短編を読んだのだ。他の短編は直接アナトリアを扱っている。素朴で小さな人々を主題にしている。主題を同じ環境から選んでいるゴーリキーと、似ることもあるかもしれない。彼は、貧しくて弱い立場の人々を書くのが誰よりもうまい⁷⁵。

このように、他の作家の影響を受けながらロマン主義的傾向を帯びていた『水車』の作品は、社会主義リアリズムへ移行していく⁷⁶。

まず、初期の作品「水車」では、ある遊牧民の青年と、青年が立ち寄った村に住む片腕を失くした娘の恋が語られる。青年は、娘を愛するあまり、娘にない腕を自分が持っていることに耐えられないと、水車に巻き込ませ、片腕を失う。

「報われない傑作」では、ある詩人の青年が、好意を寄せる娘を感動させる詩を書こうと、様々な場所へ修行に出かけるが、完成した詩集も娘に気に入ってもらえない。最後に男は、娘の首を絞めて殺してしまう。

「ある殺人のわけ」では、好意を抱く娘の気を引こうと、青年が殺人を犯す。しかし娘は、裁判にも姿を現さず、青年の行為は無駄に終わってしまう。

これら作品では、愛する者と一緒にいるために、耐え難いほどの苦痛と自己犠牲を厭わない人々の姿が描かれている。外的要因は全て排除され、抽象的で個人的な感情を追いながら、物語が進んでいく⁷⁷。

「おかしい町」では、ロマン主義的要素を残しつつも、リアリズム的傾向があらわれる⁷⁸。そして「ある森の話」、「ある船乗りの話」に至り、ロマン主義からリアリズムに移行したことがわかる。

「ある森の話」では、森に住む村人たちと、森を開発しようとする都市部の人間や役人、憲兵の衝突が取り上げられる。また、「ある船乗りの話」では、労働者が搾取に抵抗し、闘う様子が描かれた。ベズィルジによれば、この2作品の題材は、どちらも文学で初めて取り上げられたものだった⁷⁹。ここで、「ある船乗りの話」から、水夫の青年が、自分たちが不当に搾取されていることに気が付き、怒り、反乱を起こす箇所を抜粋したい。

…若い火夫は時々火かき棒によりかかつては、ほんのひと時のために閉じた黒い扉をじっとみつめたまま考えるのだった。

⁷⁴ ロシア・ソ連の小説家、劇作家。社会主義リアリズムの大御所として活躍。

⁷⁵ İlhan-Akın, p.274.

⁷⁶ ここでは、作品を書かれた順に取り上げていくが、P.19 であげた年号順とはならない。P.19 で示したのは雑誌発表年であり、実際に作品が書かれた時期とは一致しないためである。

⁷⁷ Bezirci, pp.95-96.

⁷⁸ Bezirci, p.97.

⁷⁹ Bezirci, p.108.

3, 4年後には何をしているのだろうか？こういう仕事だから、最も健康な男でさえも数年でくたくたになってしまう。その後は、機械の油さしやクレーン操縦士、ポーターに転進したり、半分障害があつて腐りかけた体をあと数日生き延ばすために奮闘する必要があつた。そしてその後は？神様だけが知っている。

下唇の左側を歯の間に挟んで頭を少し動かした。これは何も考えたくない時にする仕草だつた。今もこんなことは考えたくなかつた。そして考えたくないということに、突然自分で自分に腹を立てた。たしかに、考えることは傷口を手で揉むような苦痛を与えたが、だが本当に、手中にあるたった一つの可能性はこれだつた。彼は何もかも奪われた。思考だけは奪い取られずに済んだのだ。もはやこれを役立てなければ、それは大きな間違いだつた。

さて、全てを奪われてしまったのはなぜなのか？多くの場所で多くの人の話に耳を傾けたが、彼らよりも知識がないなどとは思えなかつた。力もあつた。それなのに純粋な偶然が彼をこんな風に、他の人たちをあんな風にしたというのか？そのとき突然気がついた。彼自身、友人、さらには彼に似た全ての人々を行動や抵抗から遠ざけているのは、この「偶然への信用」なのだ。なぜならこうした理解をすれば、人は大胆不敵と言えるほどのことをやってのけ、不当な攻撃に出る。しかし、攻撃の対象が思想や見えない力、そして“偶然”であることは、人を動けなくする。しかし、結局最後にはいつも一人であり、どんな時も現状よりも悪くなり得ない。それなのに、なぜ“偶然”に攻撃するのをためらうというのか？

そうだ。全てが偶然…彼には、羽織るものがない。そして、裕福な人たちはその 80 倍も次々と着込むことができるのだ。しかし、もし裕福な人たちがこうした人間に月々 20 リラ以上ずつ与えたとするなら、一これをして少しも打撃にならない—そうすれば彼らもあと 1 着 2 着の服を手に入れることができる。だが“偶然”はこうはいかないのだ…

偶然がこれほどまでに簡単に変わりうるとは夢にも思わなかつた。

突然お腹が鳴り始めた。少し前に食べた食事が喉まで戻ってきて、喉を火のように焼いてからもとに戻っていった。なんとひどい油か！

若い火夫の頭は回り始めた。ボイラーにぶつかり、胃はめっちゃめっちゃになっていた。頭の中では同時にこんなことを考えていた。

「あいつはなぜ肉を食べているのだ。あの酔っ払いは？」

「なぜなら、あいつは船長だからだ！」

「だがあいつは、役立たずよりももっと最悪だ！」

「だがあいつは、お前よりも勉強したんだぞ！」

「俺を学校にやってくれたら、俺だって勉強したさ…。」

「どうしたらよかったというのだ。お前の父親は早くして亡くなった。お前のどもりも放って置かれた。それにお前は学校に行けなかつた。これこそ偶然の現れじゃないか！」

若い火夫は突然シャベルと火かき棒を投げ出した。鉄の階段を駆け上がった。乗組員部屋で眠ったり、民謡を歌ったりしていた乗組員は、当番を放ってやってきた火

夫を見て事故かなにかが起こったものと思い怯えた。しかし彼は叫んだ。

「さあ。何をぼやぼやしているんだ。船長室に行って肉を要求してやろう。よこさなければ無理やりでも奪ってやるのさ。ソラマメなんかで火を燃やせるか！」

それまでこうした行動を起こすことは誰にも思いつかなかった。しかし、まるでいつも、そしてどの船でも行われているかの如く、この言葉は当然のように響いた。タバコをつま先で消すと、乗組員は彼の後をついて歩き始めた。恰幅のいい火夫はまだぶつぶつ行っていた。一部の者は武器を持っていた。甲板長とコックは船長の手先だと考え、用心深く行動した。

船はひどく揺れていた。あの焼き付けるような風が乗組員の顔をかすめた。しかし事は恐れていたほど長く困難なものではなかった。船長は焦って部屋から飛び出し、乗組員たちの方へ向かって来ていた。下には誰もいなかったので動力が落ち、船は速度を落とし次第に回転し、嵐に身を任せ始めていた。危険な状況だった。船長はコックに台所にある羊の半身をすぐにこいつらにやるようにといった。銃を持って船長を守る準備をしていた甲板長は、言われて銃をポケットにしまった。この場を占拠した乗組員が舷窓の柱に張り付いていた昔の日々を思い、ため息をついた。

半身の羊は役に立たなかった。急いで作ったカツレツは、熱すぎて食べることができなかった。海に捨てられた。

船長は、若い火夫をすぐにポート・サイドで、他の乗組員たちをイスタンブルで船から降ろした。

しかし彼らは、「ソラマメで火を起こせるか！」と言うこと、そして船長から半身の羊を奪うことを学んだのだ。

(「ある船乗りの話⁸⁰⁾)

ベズィルジによれば、次に続く「ツバメ」や「酔っ払い」といった作品でも、主人公が外的要因に影響を受けることから、リアリズムへの移行を読み取ることができる⁸¹⁾。

「ツバメ」では、2羽のツバメが夏に恋に落ちる。二羽は互いに想いを寄せ合うが、秋の訪れとともに別れざるを得なくなる。

また、「酔っ払い」では、酒場の女に恋をしつつも想いの叶わない男が、家の窓際で通りを眺めながら待つ妻に、窓から罵られる。怒りに窓から顔を引っ込めようとした妻は、窓に頭をぶつけ、窓が割れる。男が家に戻ると、子供は泣き、妻を見ると、頭から血を流して死んでいた。

ここでは、「ツバメ」から、二羽のツバメが別れなければならないことを悟る場面を抜粋したい。

…たった一つ、お互いに秘めたまま大きくなっていく不安があった。いつかやってくる、別れへの不安。

どちらもこの不安を相手に思い切って打ち明けることができないでいた。おそらく

⁸⁰ Sabahattin Ali I , pp.94-96.

⁸¹ Bezirci, pp.96-97.

相手に誤解されると思って躊躇していたのだろう。(なぜなら心で感じていることは、誤解されてしまうものなのだ。)

心の中でこの別れへの不安が大きくなるにつれて、ツバメたちはこれをうまく相手に伝える方法を考え始めた。

例えば、

「ずっと別れずにいよう、だめだろうか？」と言ってみるのがあった。しかしこれは意味が広すぎて、わかりにくかった。どうやって別れずにいようか？

「一緒に巣をつくろう！」と言ったとしても、これもとても不自然だった。それにその場合、ほかのツバメたちと同じになってしまう。

世の無常、空の無限、水、ほかの鳥の生活について語り合う一方で、ツバメたちはお互いに願いを込めて見つめ合い、「どうすれば離れずにいられるだろう？」と言いたがっていた。

ツバメたちは、この経験がそれほど甘いものでなく、お互いにこんなに親しくなっても二度と会うことはできないと理解していた。しかし彼らの話す言葉はほかのツバメたちの言葉だったし、この言葉を使って伝えたいことを伝えるのが恥ずかしく思われた。その言葉は、彼らの胸の内にあるものにはふさわしくなかった。

次第にツバメたちの目や様子には深い悲しみがさしてきた。友情について語り合っている時には、声が震えているかのようなだった。いや、そう自分たちで感じていた。しかしこんな時でもすぐにどちらかが大笑いをして、おふざけに終わってしまった。心のうちでは幸せなどではなかったのに。ついにはある日、二羽ともこうしてこのまま続いてはいかないことを悟った。お互いに心を開くことに決めた。

朝、向かい合わせになると、メスは伝えようとしていることを目で語ろうとした。ちょうどその時、止まっている柳から一枚の黄色い葉が落ちた。ゆらゆらと揺れながら、ツバメたちの間を通過して、メスがもっとも意味ありげに見つめた瞬間、彼らの視界をふさいでしまった。

オスはこの視線を見ることができなかった。

しかし二羽とも黄色い葉を見た。

オスは口を開いた。

「君と決して別れたくない・・・。」

言おうとした瞬間、びゅーっと冷たい風が吹き抜けた。

メスはオスの言葉を聞くことができなかった。

しかし二羽とも冷たい風の音を聞いた。

ツバメたちはお互い見つめあった。もう巣をつくるには遅すぎることも、秋が来たことも、別れが来たことも分かっていた。

二羽とも深呼吸した。

頂の上を何羽ものツバメが通り過ぎた。暖かい場所へと帰っていくのだ。

別れを告げた。そしてお互いを二度と見ることはなかった。

しかし二羽のツバメが小さな谷の端にある柳と、そこで過ごした素晴らしい春と夏を忘れることはなかった。

そして二羽とも、このような夏を過ごさずにいた他のツバメたちを頂の上から眺めていた。(なぜなら少数派のものたちは、多数派のものたちを何故だか頂から見るものなのだ。)

(「ツバメ⁸²」)

そして、『水車』収録作品中、後期に書かれている「かも」、「逃亡」、「憲兵のベキル」、「水路」では、現実が巧みに描写されるようになっていく。

『水車』中の短編作品の変遷について注目すべきは、作風がロマン主義から社会主義リアリズムに移っていく 1920 年代後半から 1930 年代前半である。この時期トルコ社会は政治、文学ともに大きな動きを見せた。まず政治においては一党支配体制の確立から野党の出現、解散がおこり、共和人民党が支配を強めていた。文学界では、思想を同じくする文学者たちが集まって雑誌を発行し、文学活動を活発化させた時期であった。また、サバハッティン・アリ自身がドイツに留学し、帰国した時期でもある。社会主義思想に親しみを感じたサバハッティン・アリが、思想を同じくする同志と表現の場を得て、その傾向を深めていったとは考えられないだろうか。これは、サバハッティン・アリが一人の作家として時代の影響を受けつつも、その中で個人としての要素を織り交ぜながら作品を作り、発表していたことを示す一つの要素であると見ることができる。

3.2.2 現実主義－アナトリアへの視座－

『牛の引く荷車』には、1932 年から 1935 年に書かれた作品が収められている。

これらの作品が書かれた時期、サバハッティン・アリはコンヤの中学校で教師をし、その後『クユジャック村のユースフ』の連載をめぐる問題で、約一年間刑務所で過ごしている。『牛の引く荷車』にも、それを反映するようにしてコンヤや刑務所での出来事をもとにした短編や、短編というよりは風刺、ルポルタージュに似た作品が収められている。

ベズィルジによれば、『牛の引く荷車』では『水車』に見られたような装飾的で詩的で空想的な描写はなくなり、「文学を意識せずに」書きはじめたことが見て取れる。また、登場人物の内面が、精神分析ではなく、出来事に結びつく行動や会話によって示されるようになる⁸³。この「出来事に結びついた短編」と理解される特徴は、サバハッティン・アリと同時代の作家たちに共通するものであった。しかしサバハッティン・アリはその中であつても、サイト・ファイクと並び、1940 年代にまで名前を残す代表的作家であつた⁸⁴。

サバハッティン・アリの短編で扱われる主題は限られており、それはベズィルジの分類によると次のように分けることができる。恋、弱者としての女性、農村と村人、労働者、病院と医者、囚人、知識人と有力者、子供たちである⁸⁵。前述のように、『水車』ではその

⁸² Sabahattin Ali I , pp.56-57.

⁸³ Bezirci, pp.179-180.

⁸⁴ Kurdakul, p.14.

⁸⁵ Bezirci, p.93.

作品のほとんどが恋を主題にしていた。しかし『牛の引く荷車』では、農村における地主の権力、社会階級格差、刑務所の様子、知識人への批判などが語られるようになる。

ここでは、そのうちのいくつかの例を示しておきたい。

まず、「車5 クルシュ」から、階級差を問題にした箇所を取り上げたい。ここでは子供と大人、理想と現実が対立する形で描かれ、社会に存在する階級意識を効果的に描き出している。以下の場面は、学校が終わった後に母親とおもちゃの車を売っている幼い子供が、その前を通りかかった裕福な同級生と話をするとところから始まる。

…「勉強はいつしてるの？」

「学校が終わってから。二時間くらい勉強してるよ。それからここに来るんだ。それに夜は勉強できないんだ。ガス代がたくさんかかってしまうから。」

「僕たちの先生、見た？今ここを通って行ったよ！」

「先生は僕が車を売っているのを知ってるんだ！」

そして先のほうから何人かの子供をつれて婦人がやってくるのを見つけると、会話をやめて叫んだ。

「車、5 クルシュだよ！」

二人とも手をつないでいた。スカーフを巻いた女は、悲しげにこれを見つめていた。白いオーバーシューズを履いた子供は、算数の宿題をやったかと聞いた。

「僕さっき、家でやってみたけど、わからなかった。夜お父さんに聞いてみるよ！」

すると、相手の子供は

「何を聞くの、とっても簡単だよ。」

と言って説明した。

子供たちは、完全におしゃべりに夢中になっていた。幼い売り子は「車、5 クルシュだよ」と叫ぶことすら忘れてしまっていた。

もう一人の子供が、友達の腕に絡みつくとこう言った。

「しっ！僕の隣に座ってる子の口、くさいんだ。僕はそれを話して君の横に座るよ。」

そうしたら僕たち、もっとよく勉強できるようになるしね！」

「僕の横に座っている子はどいてくれないよ。それに僕はどいてとは言えない。近所の子なんだ。その子も、僕たちみたいに貧乏なんだ。」

言葉を続けることができなくなった。

「あの子をどけて、代わりに金持ちの子を座らせたと言われるよ。」

と言おうとしたのだ。だが、やめた。

そして他のことを話し始めた。

だが丁度そのとき、白いベレー帽を被って、柔らかなグレーのコートをはおり、白いオーバーシューズを履いた子供の母親がデパートから出てきて左右を見回した。手には袋を提げていた。運転手は走って行ってそれを受け取ると、傍についた。婦人が隅のほうを見やり子供を見つけると、買い物の喜びで微笑んでいた顔は一瞬にして陰しくなった。そして、足早にそちらへと歩き出した。子供は、母親がこれほどまでに怒り自分のほうへ歩いて来るのを見ると、途端に黙り、困惑して、だが微笑を浮かべ

たままの顔で彼女を見つめていた。瞬間全てが止まった。

幼い売り子の母親は顔を上げ、転がるようにしてやってくる毛皮のコートと蛇皮のローシューズを履いた婦人を見つめていた。

婦人は近づくと、まだ困惑したような顔で微笑んでいる息子の腕をつかんだ。

「これはどういうこと？」

婦人は叫んだ。

「誰に話しかけているの？」

そしてもう片方の手で持っていた傘で、まだうっかりと友達の手をひらを握っていた幼い子供の肩を突いた。そしてわめいた。

「汚いわね。御覧なさい。この子はいあなたが話せる人間かしら？」

子供たちの腕は突然離れ、下にぶら下がった。黒いスカーフの女は壁にうずくまり幼い売り子の目は腕の痛みで涙に濡れていた。

友達の目に浮かぶ涙を見た子供は、いまだ多くを理解しなかったために心からの抵抗をした。

「お母さん。この子は僕の学校の友達なんだ！」

婦人は、顔を真っ赤にして子供の言葉をさえぎった。

「私は明日学校に電話するわ。あんたが自分と同じ階級じゃない人たちと関わってるって言ってやるわ！」

婦人は息子の手を離した。残された幼い売り子と母親に、底辺で生きろとでも言うかのような侮辱のこもった、高圧的な視線を投げると、歩き出した。息子はそれでも後ろを振り返り、涙で濡れた目を別の方向にそらす友人をみて、自分も涙ぐんだ。

幼い売り手は、震える細い声で叫んでいた。

「5 クルシュだよ…車、5 クルシュだよ！」

(「車 5 クルシュ⁸⁶」)

次に示す「壁」という作品では、サバハッティン・アリの刑務所での体験をもとに刑務所の様子や、囚人の心境が描かれている。刑務所での体験をもとにした作品には、他にも「身分証」、「冗談」、「チャイダンルック」がある。

抜粋箇所は、短編「壁」の冒頭部分である。ここで述べられているのは刑務所の現実でありサバハッティン・アリ自身の内面である。こうしたサバハッティン・アリ自身の内面の描写についてベズィルジは、著書で頻繁に「不必要である」とし、さらには「これは、サバハッティン・アリが克服することのできなかった傾向であり、時々ふと現れては物語を所々で冗長なものにする。」と述べている⁸⁷。しかし上でも述べたように、サバハッティン・アリにとって作品に自らの経験と内面を示すことは重要であった。この抜粋部分も、それを示していると言えるだろう。

長い間、海辺の、城壁の内側にある監獄に入っていた。厚い壁を打つ水の音は石造

⁸⁶ Sabahattin Ali I , pp.218-219.

⁸⁷ Bezirci, p.180.

りの監房に鳴り響き、遠い旅を彷彿とさせた。羽から雫を滴らせながら城壁の裏側を舞い上がってゆく海鳥は、鉄格子を、驚きに眼をしばたかせ見ていた。そして、あっという間に遠ざかっていくのだった。

囚人を世間と全く関わりのない監獄に閉じ込めるのは、囚人にとって最良のことだ。囚人を一番落ち込ませるのは、自由が手に届きそうなほど近くにある時、同時にそれがどれほど遠くにあるかを知ることだ。十歩先で最大の自由へといざなってくれる海の音を聞きながら、その間にある厚い城壁を見つめ、ただ想像だけでしか海を見ることができずにいるというのは、それほどの苦痛ではないだろうか？庭で人間のつま先にかがんでパンくずを集め、同じく自由のない地面で右に左に歩き回る鳥が、一度のはばたきでこの壁を越え自由を抱きしめに行くのを見ることよりも、息をすること以外に自由を思い出させるものが何一つ無い場所に閉じ込められている方がよくはないだろうか？

しかし私が入っていた監獄では、あらゆる物、あらゆる音が、自由を見せびらかした後に、突然引っ込めて持ち去るために作られたかのようにだった。城壁の上に育つ小さな木々や、海草のついた石からぶら下がっている黄色い花々は、春の空気の中で自由を奪われる痛みのすべてを痛感させた。果てしない空を白鳥のようにゆったりと泳ぐ小さな白い雲たちは、私からたった一つの慰め、忘却さえも奪うのだった。

そしてここで話されることは全て過去や外界に属していた。まるで誰一人としてここに入って来てからは生きていないかのようにだった。もしくは、記憶がこれを抑制できなかったのかもしれない。ここでの生活について口にする必要がある時でも、いやいや語られるのだった。それは人に、話している者に苦痛を与えるこうした物事を黙らせたいという感情を起こさせるのだった。

ただ白髪混じりの囚人一人が、私に監獄に來た当時の日々に起こったある出来事を話してくれた。彼がこの話を苦しまずにできるのは、おそらく彼が内よりも外に属していたからだろう。これは、中途に終わったある脱獄の物語だった。

(「壁」⁸⁸)

『声』には、1936年から1937年の間に書かれた5作品が収録されている。ここでも、現実社会に生きる人々を描き出そうとするサバハッティン・アリの姿勢は変わらない。農村と町の格差、搾取された労働者や立場の弱い女性など、社会的弱者の姿が描かれる。

まず、短編「声」(1937)では、農村と町の格差が描かれる。歌のうまい青年が、偶然出会った男に誘いを受けて農村から町へと出てくる。楽団のオーディションを受けてはみたものの、音楽の知識がないことで笑いものになってしまう。また、才能ある者の多い都会において、若者の素晴らしい歌声は一瞬人に感動を与えることはあっても、すぐに忘れ去られてしまうのだった。青年は、居心地の悪さだけを味わい、村に帰ってゆく。

「犬」(1937)でも、「声」と同じく農村と町に住む人々の間の格差を描く。町から村へ車を走らせてきた婚約者二人と女の母親は、村で羊飼いを見て珍しがる。男は、‘民衆と、

⁸⁸ Sabahattin Ali I, pp.197-198.

村人との触れ合い'をしようという気になる。しかし羊飼いの退屈そうな態度に腹を立て、その場を立ち去ろうとする。しかし、走り去る車を羊飼いの犬が追いかけると、苛立ちを発散するかのように撃ち殺す。羊飼いは親友を失い悲しみに暮れ、彼らが自分たちとは異なる、関係のない人間であることを痛感する。

「お湯」(1936)では、農村で暴挙をふるう憲兵の姿が描かれている。殺人容疑で逃亡中の夫をかくまう女の家、ある晩二人の憲兵がやってくる。棚の奥に隠してあった桶に入ったお湯を見つけ、憲兵は容疑者の夫が少し前までその家にいたであろうことを悟る。そうして、妻に暴行を加え夫をおびきだそうとするが、夫は現れない。憲兵は帰っていき、女は家の裏の森に姿を消した。

「ミス・キョステンジェ」(1936)では、ある男と女の再会が描かれる。長い間会うことがなかった昔の恋人が、互いを遠ざけながらも愛し合う姿が描かれている。この短編集の中で、唯一恋を主題にした短編である。

「月明かりの夜」(1937)では、搾取された労働者と、身を売る女が描かれる。仕事が原因で病を患った瀕死の男は、浜辺に座っていた。そこへ女がやって来る。男は、女が娼婦であることを悟ると追い払おうとする。しかしその時男に発作が起こる。女は驚いて男を自分の寝床に連れ帰り看病する。女の親身な看病に、死を目前にした男は、穏やかで安らかな感情を覚える。社会の下層で必死に生きようとする搾取された男女の姿が描かれた短編である。ベズィルジはこの短編について、内容もさることながら、形式を見てもサバハッティン・アリの前作からの成長ぶりがうかがえると述べている⁸⁹。

次に抜粋するのは、「月明かりの夜」において、搾取された労働者の苦しみや心情が描かれた箇所である。

…故郷を離れて5年になった。まだ少年と言える年齢の時からよそに出され、あらゆる仕事をし、多くのことを学んだ。最近では小さな車の修理屋の助手をしていた。病気はそこで始まったのだ。正確に言えば、子供の頃から時々現れる呼吸困難が、この工場の、空気の薄いモーター部屋で息苦しい慢性状態になったのだ。

しばらくは何とか耐えようとした。一度頭をかがめるほどの発作に襲われてからは、助かることはないだろうと感じていた。しかし日々増していくだるさと、胸の中で時々とげの束のように動き回っては、目が充血するまで彼をもたえさせる発作は悪化し続けた。傷ついた気管は、モーター部屋のじめじめと息苦しい空気を吸うだけで痛むようになっていた。

ある日の朝起きると、身動きできない状態であることに気が付いた。数日空腹のまま眠った後、やっとのことで起き上がり工場へ行ってみると、中にすら入れてもらえなかった。

…ますます衰弱してくると、死ぬのに孤独な場所を探す必要性が増した。たった一つ、恐れていることがあった。混雑した場所で、例えば道端で倒れこんでしまったら、人

⁸⁹ Bezirci, p.180.

に囲まれ、具合を尋ねられ、気付かされ、楽に死なせてはもらえないだろう。命が途絶えようとする時にそれと戦うのがひどく恐ろしかった。どんな形であれ助けられ、救われるなどという考えは遥かかなたのもので、この世で自分と関わってくれる人間があろうなどという可能性はあまりにも遠いものだった。果てることなく歩き続けているうちに鈍くなっていく苛立ちを、希望も怒りの火花も蘇らせることはなかった。

人生において孤独よりほかを知ることはなかった。だから、自分がひどく孤独な状況にあることにすら気付いていなかった。周囲にやって来ては通り過ぎていく人々に、見知らぬ物すべて、壁、木、犬を見るかのようなまっすぐで関心のない、そしておそらくは少し遠慮がちな視線を投げかけていた。

死が特別なものに思えたことなど、彼には一度としてなかった。子供の頃から周囲で最も目にしてきたものは死だった。ただ、死には一つの形があった。考えれば考えるほど、身の毛がよだつのだった。

(「月明かりの夜⁹⁰⁾」)

『新しい世界』には、1936年から1942年までの間に書かれた13の作品が収められている。この短編集でも、前作に引き続き社会的弱者が描かれる。そして舞台は、「チャイダンルック」、「女給メレッキ」と「温めようと」の3作品以外は、すべてアナトリアである。

ベズィルジは、前作『声』と『新しい世界』の違いが、その描かれ方にあるとしている。ベズィルジによればこの短編集では、一部の作品においてサバハッティン・アリのそれまでの観察者としての姿勢が、次第に批判的なものになっていく。また、作品自体もより長く深いものとなり、叙述という点でも簡潔で効果的なものに変化している⁹¹⁾。

これは、農村文学の先駆者としてのサバハッティン・アリの特徴と重ねることができる。前述のようにサバハッティン・アリ以前にも農村を描き出した作家は存在したが、観察者としての域は出なかった。ベズィルジによれば、サバハッティン・アリは旅人として農村を巡ったり、机上で農村を想像して短編を書いたわけではない。自ら経験した場所やそこにいた人々の現実の生活から題材を得、受身の観察者ではなく批判者であろうとした。この点が、他の農村文学者とサバハッティン・アリを分けているという⁹²⁾。

そのため、批判的姿勢でアナトリアを描いたこの『新しい世界』という短編集に収められた作品を、サバハッティン・アリの農村文学の集大成と考えることができるのではないか。

本論では、サバハッティン・アリが描いたアナトリアを分析することを目的としているが、以上のことからこの『新しい世界』に収められた作品を中心に扱うことが妥当であると考えられる。本章の目的は作風の変遷を追うことにあるので、これら短編についての詳細な言及は次の章で行うことにする。

⁹⁰ Sabahattin Ali II, pp.299-302.

⁹¹ Bezirci, p.182.

⁹² Bezirci, p.105.

3.2.3 視点の変化ーアナトリアの描写から都市社会批判へー

『ガラスの屋敷』に収録されているのは、1944年から1947年までに書かれた作品である。この短編集では、サバハッティン・アリの視点が農村や小さな町から、大都市へと移ってゆく。それまでアナトリアの環境や状況を描き出していた作品は、都市の様子、病院や医者を描き出し、社会批判を含んだものになっていく。その中で語られるのは、病院の面倒見の悪さ、医者による搾取を前にした国民の体験や、これら事実の社会秩序との関係である。ベズィルジによれば、前作『新しい世界』では一部の短編でしか実践されなかった批判的手法が、『ガラスの屋敷』ではさらなる発展を見せている。なかでも、「腎臓」、「救命者」、「狼と羊」、「オレンジ」、「幸せな犬」はこうした発展が如実に反映された作品である⁹³。

この視点の移行は、なぜ起こったのであろうか。

一つには、当時の政治状況が考えられる。当時のトルコでは言論統制が厳格化、インフレや第二次世界大戦政策の失敗などにより、社会不満が高まっていた。それに伴い文学の動きが活発化したことも前述の通りである。

さらにサバハッティン・アリが置かれていた状況を加味することもできる。1938年、サバハッティン・アリはアンカラに移り住むが、その後はイズミルやイスタンブールなど、都市で過ごし、改革の先導者などとも交流を結んだ。自らの経験や内面を作品に反映したサバハッティン・アリが、都市での生活をもとに短編を書いたことも考えられる。また、サバハッティン・アリにはルフアット叔父というアンカラで医者をする叔父がいた。作品にも、「僕の叔父」という表現が出てくることから、この叔父との関わりの作品への影響を推測することができる。

1944年、サバハッティン・アリはニハル・アトスズから受けた侮辱を理由に裁判を起こし、それ以降政治に巻き込まれていっている。それは、マルコ・パシャ紙を始め、数々の風刺新聞を発行していた行動にも見ることができる。こうした風刺新聞に掲載された記事が原因でこの後のサバハッティン・アリは逮捕と釈放を繰り返した。政府に近い場所に暮らし、弾圧を受けたこの状況が、サバハッティン・アリの短編の作風に影響したことが考えられる。

以上、サバハッティン・アリの短編作品の作風の変遷を見てきた。初期から後期にかけて、ロマン主義からリアリズムへ移行していく作風の変遷の要因として、時代の変化、サバハッティン・アリ自身の経験の影響を見てとることができた。

また、ベズィルジの指摘するように、リアリズムに移行して以降も、現実を描こうとする作者の視点が農村から都市へと移り、描写の姿勢も観察から批判へと移っていくことが作品から読み取れた。

このように、サバハッティン・アリの作品の中にはロマン主義的要素とリアリズムの要素が混ざり合って存在しており、前者から後者へと移行していく。この転機は、彼がアナ

⁹³ Bezirici, p.182.

トリアの農村、農民に目を向けた 1930 年代後半に起こった。前述のように晩年の作品において、サバハッティン・アリは都市社会を批判的に描くことに終始し、作品からはロマン主義的要素が失われていく。現実を批判的に描写することに集中したこれら晩年の作品の重要性も見逃すことができない。しかし、現実を批判的に描くリアリズムの姿勢と、美しい自然を描くロマン主義的要素を織り交ぜてアナトリアの人々と自然風景を取り上げた移行期の作品には、サバハッティン・アリの真骨頂があると言える。彼が、農村文学の先駆者と称されることも、これを証明している。

本論では農村文学の先駆者としてのサバハッティン・アリに注目し、彼のアナトリアを描いた作品を分析することを目的としている。しかし、アナトリアを描いた作品の中でも 1930 年代後半に描かれた作品は、以上述べた理由によりとりわけ重要であると考えられる。よって、次章ではサバハッティン・アリの後期農村作品が収められた『新しい世界』を中心にアナトリアの描写を観察し、そこから当時のアナトリアの様子および作者のアナトリアに対する姿勢を見ていきたい。

4 『新しい世界』に見るアナトリア

サバハッティン・アリは、机上の農村文学者ではなかった。アナトリアの農村で暮らした自らの経験を反映させ、短編を描いた。それを証明するかのように、農村を描いたサバハッティン・アリの短編に描かれるアナトリアの土地は、サバハッティン・アリにとって馴染みの深い土地が多い。例えばそれは、エドレミット、コンヤなどである。また、扱われる主題の豊富さや、風景描写の詳細さを見ても、それが事実であると考えることができる。

こうした事実を前提に、本論ではサバハッティン・アリが描いた短編から、当時のアナトリアの様子について探ってみる。その際、農村に内在する問題を扱った部分と、農村の外面的な風景を描いた部分の二つを分けて見ていきたい。

農村を描いた短編は、以下の通りである。

『水車』: 「ある森の話」(1930)、「かも」(1933)、「逃走」(1933)、「憲兵のベキル」(1934)

『牛の引く荷車』: 「牛の引く荷車」(1935)、「トラック」(1935)、「身分証」(1935)

『声』: 「声」(1937)、「犬」(1937)、「お湯」(1936)

『新しい世界』: 「アスファルトの道」(1936)、「女給メレッキ」(1937)、

「アイラン」(1938)、「眠気」(1939)、「よろしく」(1940)、「ある仕事の始まり」(1940)、

「会議」(1941)、「新しい世界」(1942)、「二人の女」(1942)、「マラリア」(1942)、「ハサンは窒息した」(1942)

前章で述べたように、これら作品の中でも最も成熟しているのは『新しい世界』に収められた作品である。以下、作品の分析においても『新しい世界』からの作品を中心に見ていく。

4.1 扱われるテーマ

サバハッティン・アリの作品では、一つの短編の中で複数のテーマが扱われることが多い。例えば前述の「月明かりの夜」では、都市で搾取される労働者の様子と、心を通わせる男女の物語が並行して語られる。同様にして、アナトリアの農村を描いた短編でも、農村や村人の様子と同時に農村に内在するテーマが語られる。ここでは、それらテーマに従い、農村を描いた短編を分類して見ていきたい。テーマの設定は、村人と知識人、子供、農村の女性、村人と都市、村人と憲兵、その他とする。

4.1.1 村人と知識人

村人と知識人の関係を描いた作品は、「アスファルトの道」と、「会議」である。ベズィルジはこの両作品について、批判的リアリズムへの傾倒が現れた作品であると述べている

この両作品に共通して描かれているのは、知識人の農村への無理解や、冷淡かつ驕り高ぶった態度と、そこから生じる知識人と村人との距離である。この距離は、物理的であったり、心理的であったりする。サバハッティン・アリは自らの意見を直接的な言葉で語ることはないが、細かな描写の中に、その批判的態度が見て取れる。

「会議」の冒頭部分には次のような箇所がある。

…大都市の一つに近いところにある村に、新たに寄宿学校が開校しようとしていた。開校式には、教育相、監査官、町の要人と‘農村派’たちがかたまりになって車で出かけて行った。村人たちは、このゴルフパンツを履き、帽子をかぶり、黒眼鏡をかけ、首にカメラを提げた集団を、道の両端に引き下がり、深い静寂の中に出迎えた。
(「会議⁹⁵」)

また、「アスファルトの道」にも、類似した場面が描かれている。この短編では、教師として村に派遣された青年が、町と村を結ぶ道の劣悪な環境を改善すべく、舗装道路を作ってもらうため尽力する姿が描かれる。次に引用する場面は、道路の完成式典での様子である。

…民衆や村人たちは遠くから眺めていた。私は彼らの側に行って話をした。喜びに、皆を抱きしめたいくなる。私は自分の場所に戻ってから思いつき、村人たちに近くに来て見るよう合図した。この道は、誰よりもまず彼らのものなのだ。何人かが進み出ようとしたが、憲兵が放っておかなかった。私も声を上げなかったが、うれしさは半分消えてしまった。

県知事は長いこと演説をした。声があまり大きくなかったためよく聞こえなかったが、ただ私の耳には、「共和国、公共事業…我々の指導…全ては民衆のために…」といった言葉が聞こえてきた。他にも何人か短い言葉を述べた。テープカットが行われ、県知事の車を先頭に、車の列がさっそうと登場した。その後ろからは役人たちが何歩か歩いて見せた。皆、足をアスファルトに慣らすかのようにしていた。村人たちは、おそらく臆病から、またおそらくは何か言われるのではないかと躊躇して、アスファルトを踏む勇気を出せずに道路の両脇の土の部分歩いている。目を大きくして、道の真ん中を、ついたばかりの車のタイヤの跡がピカピカ光るアスファルトを見ていた。
(「アスファルトの道⁹⁶」)

これらの場面で描かれるのは、場面を同じくしながらも決して交わることのない知識人と村人たちの物理的距離である。

皮肉な描写で知識人と村人たちの心理的距離を描いた箇所もある。まず「会議」から、

⁹⁴ Bezirci, p.182.

⁹⁵ Sabahattin Ali II, p.82.

⁹⁶ Sabahattin Ali II, p.15.

村を見て回る町の要人たちの描写を抜粋したい。

…客人たちは、村とその周辺をものの5分か10分で回りきった。‘農村派’たちは、道端やカフェで出会った一部の村人たちとおしゃべりをしようと試みた。その中に、農村派教育を受けるためパラグアイまで行き、何年もそこに滞在していた者があった。彼は声を優しく和らげながら、様々なことを尋ねては、気のない返事を得ていた。どれほど頑張っても、会話はいくつかの質問と答えより先に進むことができなかった。質問する方は相手に対し、なぜこれほどまでに無知で平然としていられるのかと、質問された方は、相手がなぜこのようなわけのわからないことを聞いてくるのかと考えながら、互いに別れるのだった。

(「会議⁹⁷」)

「アスファルトの道」の主人公である情熱を持った青年教師を最初に迎える村人の姿も、冷たいものである。

…カフェの前には何人かの老人のほかには誰も残っていなかった。彼らは私を見つけると立ち上がり、こちらを見つめた。私は傍に行き座り、自分が何者かを説明した。その中の一人は村長だった。前任の教師が去ってから半年が経ち、その時以来学校は閉まっているのだと言った。

「まだ作物は全部刈り入れられていない。子供たちは学校になど来ないさ。何日かゆっくり休むといい！」

(「アスファルトの道⁹⁸」)

以上のようにして、この2つの作品からは、農村の人々と都市の知識人の互いに相容れない関係が読み取れる。また、これについてサバハッティン・アリが、都市の知識人や有力者の傲慢と無理解を問題視し、批判的に見ているということもわかる。

4.1.2 子供

サバハッティン・アリの短編のいくつかでは、子供が描かれる。農村を舞台にした短編においても、「アイラン」がそれに相当する。

「アイラン」は、互いに呼応し合う細かい情景描写と心理描写で悲劇的な内容にさらなる効果を与えた短編である。

この物語の主人公は幼い少年ハサンである。ハサンの母親は町に出稼ぎに行っていて、家には週に一度しか戻ってこない。幼い兄弟のためにお金を稼ごうと、冬にもかかわらず、アイランが入った水差しとコップを抱え、ハサンは片道二時間かけて駅まで売りに行く。

次に引用する場面では、ハサンが村から駅に行くまでの間に、アナトリアの風景が詳細

⁹⁷ Sabahattin Ali II, p.83.

⁹⁸ Sabahattin Ali II, p.10.

に描かれる。その情景の荒涼とした様子は、ハサンの置かれた状況の厳しさをうかがわせる。

…村から駅に続く道は溶けた雪でひざまでぬかるんでいた。二本の槍ほどの高さまで上った太陽は、まだ畑を覆っている雪のうえにキラキラと、まぶしいほどに輝いている。しかし道の汚い水溜りにはまると、くすんだ黄色になって機嫌を悪くしていた。

大きめの、底が鋌打ちされた靴をはだしの足に履いた小さなハサンは、右腕に持った水差しを休み休み頑張って引きずっていた。

…夏も冬も毎日通わねばならない片道二時間の道のりは、今回はもっと長くなったようだった。丁度道の間地点に立っている小さな枯れた柳の木はまだ地平線上、霧の中だった。

小さなハサンは、何年も前から目にしているものを、関心のない目で見ている。枯れた葦の中、不毛の平野を突き抜け、側に行くまで気付かない四歩幅ほどの小さな谷。そこに三つの厚板を並べて作られている橋は、もう壊れてしまいそうなほど揺れるようになっていた。

その少し上の方で、小さな壁にもたれて平野を見渡す水車の音は聞こえていなかった。こんな冬の季節には水車は3日動いて5日止まる。ドアの前に立つ、葉の落ちきった三本の柳と合わさって、完全に捨て去られた廃墟を思い起こさせた。

小さなハサンは何も考えずに進んでいた。家で自分の帰りを待っている二人の小さな兄弟も、片道四時間の町の中心で家政婦をしている母親のことも今は頭になかった。アイランを売るか売らないかも考えていなかった。頭にはただ一つのことがあった。この道を再び歩くこと。歩いて帰らねばならないこと…。

ハサンは、長い間泣き続けた後にするような溜息をついた。コップを握るひび割れた左手の甲で鼻をぬぐった。前方を見ると駅の近くまできたことに気付いた。

両側を禿げた山に挟まれたこの長い平野のちょうど真ん中にぽつんと立ち、周りに茂る葉のないアカシヤのせいでますます哀れに映るこの寂しい建物は、平野に適当に投げ込まれた石の破片を思わせた。日に二回やってくる郵便汽車さえも、なぜこんな辺鄙な所に止まっているのかと自分に驚いているかのようにだったし、数分止まった後に再び出発する時に鳴らす警笛の音は、喜び混じりの口笛のように聞こえた。

(「アイラン⁹⁹」)

この短編では、主人公ハサンのアイランを売る姿を追う中で、農村に住む人々の孤独や苦しみを描かれる。

…(ホームの) 端から端まで三往復走った。水差しの角ばった底が細い足にぶつかって痛い。しかしハサンは小さな顔をくしゃくしゃにして

⁹⁹ Sabahattin Ali II, pp.36-37.

「アイラン、できたてのアイランだよ！」と言いつづけていた。

四杯、せめて四杯だけでも売れたら。これで得られる 10 クルシュがあれば家に黒パンを一つ持って帰ることができるのだ。彼が帰ってくるのを、空腹のあまり無感覚になりながらも楽しみに待っている二人の幼い兄弟の目が、頭の中に稲妻のように浮かんで消えていく中でハサンは叫びつづけていた。

「出来立てのアイランだよ・・・出来立ての・・・」

母親は家事手伝いをして働いている場所から週に一回、何時間かのためにやって来る。ユフカを少し、玉ねぎをいくつか、時にはほんの一口のシロップも持ってきてくれた。しかしこれらは三つの空の胃袋には二日と持たなかった。その後、二人を食べさせる役目はハサンに降りてくるのだった。二歳と五歳のこのやせた子供たちがすることと言えばすべて食べることであり、彼らには、天井の低い小さな家で何を与えられようともそれは食物であるかのようにだった。小さなハサンは毎日ヨーグルトをつくるために使う酵母を、彼らに見つからないよう、手の届かない所に一天井の柱が壁とつながる隅のところに一隠さねばならなかった。そして毎日、駅にいる間にこの二人の腹をすかせた胃袋が、同じ屋根の下で同じ空腹を味わっている老いたヤギですら食べてしまうのではないかと心配していた。

夜はたいい、小脇に抱えて持ってきたパンを出し、アイランを空けるための土鍋を持って来ようと暖炉のわきのところにいく。そして食卓に向き直ってみて、あの粘土のようなパンのほかにも何も残っていないのを見るのが恐ろしかった。そんな時、自分は土鍋のアイランを飲む。空腹に慣れた胃袋が軽くぐうっと鳴るのを気にもとめず、古い羊皮の上で眠る兄弟の横で穴だらけで油っぽい毛布の中に入り込むのだった。

ハサンが本当に恐れていたこと、それは兄弟のこの井戸のようなむさぼり方や決して満たされることのない胃袋ではなかった。手ぶらで帰った時、この二つの痩せた生物が自分をどれだけ輝き見開いた眼で、そしてどれほど果てしない恨みを持って見つめるかを思い出すと恐ろしくなるのだった。今もこのことを恐れて叫んでいた。

(「アイラン」¹⁰⁰)

また、「アイラン」のほかにも、農村を描いた作品の中に子供は頻繁に登場する。例えば、「よろしく」、「女給メレッキ」、「温めようと」などである。これら作品に登場する子供たちは皆、無力であり、貧困にあえぎ懸命に生きようとする。また、どの作品においても、子供の登場が主人公に何らかの精神的変化を与える役割を果たしている。サバハッティン・アリが子供に向けた同情、そして愛情を見て取ることができるだろう。

4.1.3 農村の女性

農村の女性を描いた作品は、「温めようと」、「新しい世界」、「二人の女」である。この中で描かれる女性は、皆が社会的弱者である。「温めようと」では、洗濯をしてお金を稼ぎ、

¹⁰⁰ Sabahattin Ali II, pp.38-39.

貧しい生活をする母親が、「新しい世界」では農村の踊り子が、「二人の女」ではアーの二人の妻が描かれる。

まず、「二人の女」から抜粋したい。‘二人の女’とは、ある村のアーの二人の妻をさす。この二人の妻は、老婆と若い娘である。病床にあったアーが夜に息を引き取ると、老婆のほうで、アーの財産の隠し場所を探し出そうとする。しかし、見つからない。結局最後は食物貯蔵庫の鍵をあけて入り、二人の女は好きなだけ料理をし、満足のいくまで食べる。その後、夜が明けるのを待って、近所の人々に悲嘆にくれながらこの訃報を知らせる。

抜粋箇所では、老婆がアーの金のありかを探しながら、見つからないことに腹をたて、第二妻である若い娘に自らの苦勞を語る。

…「40 年間悲しみに暮れてきた。第二妻をもらった時も、私は何も言わなかった。逝くとなったら、金のありかを言わずに逝ってしまった。死んじまえばよかったのに！」
「死んでしまったではないですか、ハジェルさん！」
「墓で安らかになんぞ眠らずにいればいい。これから死ぬまでまたこうやって畑で働くんだ！おいで、この金を分け合おうとしよう！」

見つからない金を探すのを、第二妻はあきらめようとする。すると老婆は再び自らの苦勞を振り返る。

…「死体をジャッカルが食べちゃいけないって言うのかい？ここに来てから私は奴隷のように働いた。私も働いた。あんたも 6 年働いた。それで、何がある？あの人は毎年穀物売って 7、8 枚お札を手に入れた。スミノミザクラ、ブドウの分はまた別にね。」

結局金を見つけることができず二人ともあきらめる場になっても、老婆は独り言のように続ける。

…「安らかには眠らせない。40 年間あの人の家に住んで、大きなオス牛みたいに働いた。一日だって満腹食べたことはないよ。それでも何も言わずにいた。何にせよいつか死ぬ。そうすれば全て私のものになると思ってたのさ。残酷にもお金を持ったまま逝っちまったよ。」

こうした老婆の発話から、農村の女性が抑圧された環境で必死に生きようとした姿が浮かびあがる。

次に、「温めようと」からの抜粋である。「温めようと」で描かれるのは、村に住む女である。女は近くの町に出て洗濯をし、金を稼いでいた。ある日女は金に困り、主人公の男のもとへ仕事を求めにやって来る。男は二日後に来てくれれば洗濯を任せることを約束するが、女は現れない。心配になった男が女のもとを訪ねると、寒さに凍える娘を温めてや

るため、家を出れなかったと女は言う。娘は死に、男は助けを求めに通りに飛びだして行く。

次に抜粋するのは、女が仕事を求めて男の元へやって来る場面である。

…女は、訪ねたすべての場所で見たと変わらないこの逃れようとする仕草に、衝撃ではなく、しかし顔に突然驚愕の表情を得た、表現のつかない絶望的な様子で答えた。すべての器官が戦慄で震えているかのようにだった。隅にある消えそうな電灯の光は、薄暗い通りに伸びた女の影と共に震えていた。

やっと聞き取れるほどの声で女は言った。

「だんな！だんな…洗う物はありませんか？」

「ない！」

私は言った。

(「温めようと¹⁰¹」)

続いて、洗濯に現れなかった女の家を男が訪ね、子供が死んでしまったことを知る場面である。

…女はその場に崩れ落ちた。部屋の真ん中でひざをついたまま揺れている。聞こえるか聞こえないかの声ですすり泣いていた。

「何と言えればいいの。アッラーはあの子をこれ以上苦しませはしなかった。どうして私のことは苦しませるんだ。どうしたらいいのか私にもわからない。誰を頼り、誰に相談すればいいの。ああ、私の娘。ああ…。」

(「温めようと¹⁰²」)

最後に、「新しい世界」である。ベズィルジはこの作品をサバハッティン・アリの最も素晴らしい短編小説の一つとしている¹⁰³。この作品では、主人公の踊り子イエニ・ドゥンヤ（新しい世界）の、憐れな人生と周囲の無関心が悲劇的に描かれる。同時に、農村の現実や、情景描写も織り込まれている。

主人公イエニ・ドゥンヤは、若い頃名を馳せた踊り子であったが、魅力を失う。村の結婚式に呼ばれ、宴で踊りを披露するが、野次を浴びる。そこに、地主の命令で別の若い踊り子が連れてこられる。イエニ・ドゥンヤは彼女に対抗しようと、渾身の踊りを見せ客からの人気を取戻す。しかし、翌日には疲労で体調を崩す。イエニ・ドゥンヤの体調に気を留める者は誰一人としておらず、イエニ・ドゥンヤは結婚の儀礼に従い花婿の村から花嫁の村へと、無理な長旅を強いられる。そして、到着した村で誰に看取られることもなく、亡くなる。イエニ・ドゥンヤを連れて来た一行は、結婚式が終わると彼女を忘れて村を去ろうとする。イエニ・ドゥンヤを家で看病していた老女は、死体を置いて行かれてはたま

¹⁰¹ Sabahattin Ali II, p.49.

¹⁰² Sabahattin Ali II, p.54.

¹⁰³ Bezirci, p.104.

らないと一行を追い、遺体を持って行くようにと話す。それを聞いた一行の長である地主は、しぶしぶとイエニ・ドゥンヤを引き取り、帰っていく。

以下、この短編作品の最後を抜粋する。

…ヒュセインはそれ以上聞こうとしなかった。老女に背を向けると、後ろで待っていた車の方へ歩いて行った。皆が場所を埋め、前の車はかなり遠ざかっていたため、死体を置く場所を見つけるのはとても困難だった。ヒュセインは、10 歳から 15 歳の 7 人の子どもたちが乗った車を何とか後ろに戻って来させた。イエニ・ドゥンヤを花嫁の家から持って来られた古い絨毯にくるむと、車の端に寝かせた。御者は車を走らせ、先を行く車に追いついた。一行は、再び出発した。

先頭には、頭に装飾を施した馬の花嫁の馬車、最後尾には、イエニ・ドゥンヤを乗せた馬者がいた。子どもたちの間で、何束かの枯れ草の上に横たわっている死体の揺れるたびに絨毯から外にはみ出す頭部は、タイヤが石にぶつかるたびに馬車の側面にぶつかっている。髪の毛は、枯れ草とわらにまみれていた。

(「新しい世界¹⁰⁴」)

以上見てきたように、女性たちの姿はどれも悲劇的に描かれ、社会的な力を持たず、搾取され、無視され続けた様子が強調される。

4.1.4 村人と都市

村人と都市の関わりは、「ある森の話」、「トラック」、「声」、「犬」で描かれる。

「ある森の話」は、守り続けてきた森を切り倒され、それでも必死に森と村を守ろうとした老人の話である。

それとは対照的に、「トラック」では、村を出て、都市に出稼ぎへ行こうとする若者の話が語られる。どちらの作品にも共通するのは、資本主義社会を象徴するような都市を前に、強い影響を受けざるを得ない農村やそこに住む人々の姿である。両作品において、農村の孤独で、厳しい状況が語られる箇所がある。

まず、「ある森の話」から、農村の人々がいかに孤立した社会で生きているのかを示す部分である。

…わしらの父は祖父の、わしらも父の姿を見て彼らがするようにしてきた。彼らのように生きていたのだ。これに満足していた。地上に他のことがあり得るなどとも知りもしなかったから、満足しないわけがない。やるべきことは全て、与えられた土地を息子に受け継ぐこと、彼らにも同じことをするように言いつけることだと思っていた。外部からの手がこうしたことをめちゃくちゃにするだろうなどと、考えもしなかった。

(「ある森の話¹⁰⁵」)

¹⁰⁴ Sabahattin II, p.99.

次に、短編「トラック」では、農村で貧困に苦しみ、都市へ出稼ぎに行かざるを得なくなった親子の姿が描かれる。

…不作で収入がなくなり、税金が払えなくなり、そして塩やガスが尽きて新しい物を買ってこれられない状況に陥ると、息子は父親を片隅に引っ張ってゆき、言った。

「父さん、僕は町へ行って働いてくる。見ろ、村の半分は行っちゃった。イズミルには仕事がたくさんあるらしい。工場なんかじゃ一人当たり半リラの日給が出るらしい。冬にここに残ってお荷物になるくらいなら、町へ行って仕事を探さ。収穫の時期が来たらまた戻ってくる。畑で働くよ…。」

年老いた父親は、よく理解できず、また貧乏のために口を出して意見することができなくなっていたため「わかった。」と言った。こうして18歳の若者は、以前にイズミルに行行って帰ってきた者たちのところへ、相談しに行った。

(「トラック」¹⁰⁶)

前述の短編作品「声」では、農村でサズを片手に歌を歌う青年の話が語られる。偶然彼の歌声を聞いた都市の人間が、オーケストラのオーディションを受けるよう青年にすすめる。青年はオーディションをうけに町までやってくるが、音楽に対する無知と、一時感動することはあっても、目新しいものにすぐ心を奪われてしまう都市の雰囲気と恥をかかされ、帰っていつてしまう。

つぎに、先にもあらすじを紹介した短編作品「犬」である。サバハッティン・アリの農村を描いた作品では、農村の人々の経験や心理が多く語られる。または、ルポルタージュに近い形でサバハッティン・アリが実際見聞きしたと思われる出来事が、作家の視点で語られる。その中にあって、短編作品「犬」では、都市から農村にやって来た人間の心理が描写される。都市の人間の行動の描写だけでなく、心理描写にまで至るのは、この作品のみと言ってもいいだろう。この作品では、都市の人々の驕りや誇り、農村に対する蔑みの感情が描かれる。そしてこうした都市の人間に対峙した時の羊飼いの心理描写により、サバハッティン・アリの批判的姿勢が読み取れる。

まず、最初に町から車を走らせてきた婚約者と女の母親が、羊飼いに対面する場面である。

…「羊飼いと話をするなんて、思いも寄らなかったな！」

若い娘は、肩、腕、目をふらつかせながら、

「興味があるわ。私村人を見たことがないの！」と言った。

隣に座っていた母親は、顔を向けずに

「そんなこと！」と言った。「アンカラの市場や道端で見たことないの？」

¹⁰⁵ Sabaattin I , p.99.

¹⁰⁶ Sabahattin Ali I ,p.170.

「ああ！あれは村人なの。まあ。だけど私この羊飼いなども見てみたいわ。
後で子ヤギにも触りたいわ。」

エンジニアの男は、

「ここには子ヤギはいないよ。全部大人さ！」と言った。

…若いエンジニアは、少し離れたところに立っている羊飼いに、

「こちらにおいで！」と言った。「きみはどこの人だい？」

羊飼いは平野の北側に見える村を指した。

「ここのもんさ！」

「このヤギはきみのかい？」

「いや、アーのさ！」

「毎日ここへ来て放牧してるのかい？」

羊飼いは、一瞬相手を眺め回し、なぜこんなことを訊かれているのか理解しようとした。しかし肩をすくめ、

「どこにでも行くよ。決まっていないんだ！」とつぶやいた。

しばらくすると車の中からエンジニアの婚約者とその母が現れる。羊飼いは、エンジニアの婚約者である女に興味を抱き、見入ってしまう。そして、エンジニアの質問への答えをおざなりにする。

…ほとんどの質問が答えのないままになっているのを見て、次第に‘民衆と、村人とのふれ合い’に魅かれ始めた、正確には羊飼いの自信に満ちたふるまいと尊厳にいらつきを覚えたために彼を困らせようとしたエンジニアは、優勢に立とうとする姿勢で、しかしはっきりとした非難の念をこめて、相手に

「きみはなぜ返事をしないんだい？」と言った。

「僕たちはきみと関わろうとしているのに。きみは僕たちの村の友達なんだ。僕らはきみの、だ！」

エンジニアにどこを見ているのかと咎められ、嘲笑されると、羊飼いははっとする。

…羊飼いは後ろを向いた。もうこの会話には飽きてしまったのが見てとれた。そこでエンジニアは、民衆に話しかけ、彼らに正しい道を示す社会的義務があることを思い出し、話し始めた。

「僕の言うことを聞くんだ、羊飼いの友よ。」

「きみ達はまだまだとても遅れている。見てみろ！僕たちは、自分たちの故郷や国を離れて君たちと話すために、君たちの苦労に耳を傾けるためにここへ来ているのだ。君たちは、目や耳を全開にして役立てなければならない場所で周囲を見渡しているんだ。きみが必要としているものは何だい？きみが抱えている問題は何だい？それが知りたいんだ。僕に心を開いてくれないといけないよ。僕はきみの兄弟なんだ。違うかい？」

羊飼いは真っ赤になった。これら全ての言葉から理解したものは一つなかった。ただ相手が何らかの形で攻撃してきているのを感じ、悲しく思った。

エンジニアの婚約者は、この会話に飽きてしまう。エンジニアはさらに何かを言おうとするが、一行はその場を立ち去る。羊飼いは、何か失礼なことをしてしまったような気がして後悔するが、エンジニアは自らの言葉を理解してもらえず、誇りを傷つけられたと感じる。以下の箇所には都市の人間の驕りと農村への蔑みがよく描かれているだろう。

…エンジニアは突然ひどい怒りに駆られた。卑しい羊飼いの前で嘆願するように言葉を発してしまったことは、彼にとって耐えられないほどの自尊心への傷に思われた。少し前に発した言葉のなかでは兄弟心を語ったが、羊飼いと自身の間に大きな差がはっきりと現れ、歯と歯の間から、

「人間じゃない、この馬鹿どもは！」とつぶやいた。

婚約者の叫び声でびっくりとした。横を振り向くと、車の両脇で飛び跳ねている犬に気がついた。エンジニアの手は素早く後ろポケットに行った。そして止まった。考えた。気付かぬうちに望んでいたこの行動は、彼には今最も必要なことのように思われた。他の考えがなければ、しまいには、この瞬間銃を羊飼いにすら使ってしまうそうだった。父親の形見である小さなライフル銃を横開きになった窓の滑りガラスから外に伸ばし、雑種の犬の開いた口に向かって撃った。そしてエンジンをふかし、車とともに砂埃のなかに隠れてしまった。

カラバシュは、長い毛と一緒に道の端に転がった。そしてすぐに動かなくなった。もう一匹の犬はカラバシュの傍で、それ以上は進みたくないと言うかのように足を前に伸ばして待っていた。羊飼いは走ってそこまで行った。ひざをついて、愛する友の頭をなでた。さっきまでの後悔に代わり、よりはっきりとした、確かな痛みを感じた。去る者たちに何の関係も、親しみもなく、それどころか彼らが自分を最愛のものから引き離れたことをはっきりと見てとり、目に涙をためながら死んでしまった犬をなでていた。

(「犬¹⁰⁷」)

4.1.5 村人と憲兵

村人と憲兵の関係を描いた作品は、「かも」、「逃亡」、「憲兵のベキル」、「お湯」、「身分証」である。ここで描かれるのはすべて、憲兵の村人に対する暴挙、なす術もなく抑圧された村人たちの姿である。

「かも」では、監獄で具合を悪くした夫のために、かもを盗んで監獄に届ける妻の姿が描かれる。病気の夫は、監房を移るために看守長にかもを納めて欲しいと妻に頼むのである。しかし妻がかもを持っていった時には、夫は病院に入っている。憲兵はそのことを知らせず、かもだけを妻から奪う。妻は、村に帰ると盗みの罪を問われ、捕らえられる。

¹⁰⁷ Sabahattin Ali I ,pp.288-292.

「逃亡」の主人公は、拘留された男である。男は無実であるにもかかわらず、憲兵の拷問により自白に追い込まれ、村に強盗に入ったと言ってしまふ。さらに物品証拠のありかに無関係の友人の名を口にしてしまい、罪の意識にさいなまれながら憲兵に連れられ友人のもとへ向かう。その途中逃亡を計るが、憲兵に銃で撃たれ、死んでしまふ。

「お湯」では、前章で述べた通り、村で殺人容疑者の妻に暴行を加える憲兵の姿が描かれている。

「身分証」には、ある老人が描かれる。この老人はアーに不当に土地を奪われたと裁判を起こした。その際身分証の提出を求められたが紛失していたため、親戚で同じ名前の者の身分証を提出した。裁判のあと、通行税を徴収しに憲兵がやってきて、未納者の中にこの老人の名前を呼んだ。老人は、自分の年齢ならば免除されるはずであると考えているが、身分証に書いてある年齢は、老人のものではない。しかし憲兵は、有無を言わず老人を捕らえ、監獄に送ってしまう。

これまでのテーマについては『新しい世界』からの作品を中心にサバハッティン・アリの後期の短編を見てきたが、村人と憲兵を描いた作品に後期のものではなく、すべて 1930 年代前半に書かれている。これら作品、特に『水車』収録中の「かも」と「逃亡」の叙述は、単に出来事を述べたのみにとどまっており、徐々に批判的姿勢を成熟させた後期作品との差があらわれている。しかしこれについてベズィルジは、サバハッティン・アリは憲兵を描いた短編において批判者よりも観察者であろうとしたと述べ、このテーマに勇気と誠実さをもって着手した、初めての作家であると述べている¹⁰⁸。

4.1.6 その他

その他の作品についても、農村における何らかの問題が描写され、浮かび上がる。

「牛の引く荷車」では、息子を殺害されながらも、裁判に行くために村と町を往復する手間を厭う村人に説得され沈黙を守らねばならなかった母親の姿が描かれている。

「眠気」では、不眠不休でトラックを運転し続けるトラック運転手が描かれる。

「ある仕事のはじめ」では、農村で娼婦の仲介人をする男が、その仕事を始めるまでのいきさつが語られる。

「キニーネ硫酸塩」では、医者に診てもらうことのできない貧しい農村の夫婦の姿が描かれる。

「ハサンは溺れ死んだ」では、違う村に住む男女の叶わぬ恋と、恋に破れた男女の悲しい結末が山や自然の美しく細かな描写とともに語られる。

他のテーマに沿った作品同様、幸せな結末で終わる作品は一つもない。ベズィルジの指摘によれば、サバハッティン・アリのアナトリアの描き方は「現実主義者」としてのものであり、飾り立てることなくアナトリアの問題や醜さをありのままに描き出している。しかし一方で、国民や国に対する過剰な愛が、アナトリアの問題や醜さの描写を大げさなも

¹⁰⁸ Bezirci, p.152.

のにし、アナトリアの悲しむべき悪い側面だけを描きださせているという¹⁰⁹。ここにはやはり、観察者であるよりも批判者として作品を描くようになっていったサバハッティン・アリの姿勢の変化が影響を与えていると考えることができるだろう。

ここまで、サバハッティン・アリが農村を描いた作品に見られるテーマについてみてきた。一つ一つのテーマに沿って具体的な出来事を提示し、その中に農村の人々の姿を描き出したこれら作品は、サバハッティン・アリの農村に対する深く具体的な観察を示していると言えるだろう。ここでも、サバハッティン・アリが実際に農村で暮らした経験が影響を与えていると考えることができる。

4.2 風景描写

サバハッティン・アリのどの短編においても、主人公たちはある一連の出来事の中に描かれる。短編「アイラン」でも見られたように、出来事を追い、主人公の姿を描く中にサバハッティン・アリは巧みに情景描写を加え、アナトリアの姿を伝えている。ここでは、作品の中のそうした情景描写のいくつかを抜粋し、アナトリアの風景について考えてみたい。

4.2.1 村の様子

まず、村の様子を描いた箇所を見てみたい。

「アスファルトの道」から抜粋する。抜粋箇所は、村の教師として任命された青年が、村に向かう場面である。ここに描かれるのは、寂寥とした村の姿である。しかし、主人公の青年がなつかしさを覚えていることから、この風景が典型的なものであると考えられる。

…目的の村を運転手が教えてくれた。そこは今座っている場所から 30 分ほどのところにあり、灰色の瓦礫の山だった。片隅でか細く伸びる、これもまた灰色のポプラ、そこでは少ないながらも水が出るらしかった。

…夜になり始めていた。村に近づくにつれ、あたりは真っ赤に染まった。赤い海のように、光り輝いてはかすかに動く背丈がばらばらの荒れ野の草の上で、私の長い影が横たわっていた。影の頭は、先の方でバッタがあちこち飛び跳ねている草の間に消えていた。

村のはずれの何軒かの家の前に来ると、燃える牛糞の匂いが鼻をついた。目前には鉄板の上でユフカが焼かれているかまどや、待ちわびるはだしの子供たちが現れた。

¹⁰⁹ Bezirci, p.181.

道端では、まだ家を見つけられない数頭の牛がしっぽで腰を打ちながら歩いている。そして時々鳴いていた。その鳴き声といたら、長いこと考えごとをした末に発せられた意味深い言葉のようだった。

進むにつれて強くなる肥料のきつい臭いは、私をさらにここへ近づけた。村は生きて働く生物だ。そしてこの匂いはその汗の臭いなのだ。この世でどんな臭いも私をこれほどまでに興奮させ、頭の中に次々と思い出を蘇らせることはなかった。

(「アスファルトの道¹¹⁰」)

「よろしく」では、ある床屋の恋と同時に、農村の単調で退屈な生活が描かれている。村の描写においても、このテーマに沿っていることが見て取れる。

…あたりには、時々吹く風が舞い上がらせる砂埃以外動きがなかった。崩壊したモスクでなんとか立っているミナレットは、壁の上に生えた野生のイチジクの木と抱き合っていた。古物商が金敷きの上で眠っている。わき道の一つでは二人の子供が汚い水流の前で、土で水路を作って遊んでいた。

(「よろしく¹¹¹」)

「新しい世界」からは、結婚式を前に賑わう村の姿である。ここでは、農村の中ののどかで穏やかな日常の姿が描かれている。

…村は尾根の上に区画ごとに並べられた家で構成されていた。下の方にある家の屋根は上の方にある家の前を通過する通りになっていた。この屋根の上はすべて、老いも若きも女で埋まっていた。かたまりになって話しているところもあれば、子供をあやしたり、乳を飲ませたりする者もある。下で太鼓たたきの回りで押し合いをし、馬鹿騒ぎをする少し大きな子供たちに向かって叫んでいる者もあった。

(「新しい世界¹¹²」)

次に抜粋するのは、「ある仕事のはじめ」から、ある村に近い駅の描写である。作品中のほんの一部にすぎないこうした描写の中にも、村人たちの抑圧された姿が描かれている。

…車の運転手たちは、電車が発車すれば稼げなくなってしまうことを恐れ、失った客をプラットフォームで四方走り回って探していた。士官学校の生徒はスカーフをかぶった母親と別れの挨拶をしている。所々に並べられたスーツケースのそばでは、マフラーを巻きつけた子供たちが眠ったり、ぐずったりしている。駅のまだ舗装されていないむき出しの暗い場所では、村人たちがショルダーバックやバスケットの間にうずくまって座っていた。

¹¹⁰ Sabahattin Ali II, pp.9-10.

¹¹¹ Sabahattin Ali II, p.67.

¹¹² Sabahattin Ali II, p.86.

(「ある仕事のはじめ¹¹³⁾)

最後に、「温めようと」から、町のはずれにある村へと続く道の描写である。

…両側に高い庭壁が伸びる狭く埃りっぽい道をずっと進んでいくと、町の外れに出た。人の高さほどもない背の低い家々が、アラブ地区の始まりだった。エジプトの元はイブラヒム・パシャの軍隊に所属しコンヤに残った人たちが作ったこの村は、すでに町と一体化し、最貧困層の人々が住む地区になっていた。ステップからの風に吹きさらしになっている通りにねじれながら吹き込む凍てつく風は、地面の埃を、微粒子のように凍った雪と混じらせ空まで吹き飛ばしていた。

(「温めようと¹¹⁴⁾)

こうした描写から読み取れるのは、まず一つに、村人たちにとっての村という社会であり、平和な雰囲気包まれている。しかし、ひとたび外の世界と接触すると、そこは暗く、さびれた雰囲気のする取り残された地区となる。農村の人々の搾取され、抑圧された姿と同時に、農村それ自体も、社会の中で隔離された地域として描かれている。

4.2.2 自然描写

フィリズ・アリは著書で、「どのような条件下でも、自然と、特に山の音は父をいつも呼んでいる。」と述べている¹¹⁵⁾。

このことからわかるように、サバハッティン・アリの短編には自然描写が非常に多い。その詳細な描写は、鋭い観察がなければ不可能であり、そのことが作者の自然への愛を裏付ける。またそうした描写の中から、アナトリアという土地がどのような場所であったのかを読み取ることができる。と考える。

まず、「キニーネ硫酸塩」から、主人公が山中を歩く場面の自然描写を抜粋する。

…太陽は、ずいぶん前に後ろの丘の影に隠れ、向かい側の尾根のすそから頂上に向かい昇り始めていた。峡谷の私が登って来た方から、松の香りの風が吹いていた。少し先では、耕された畑でコオロギが歌い、バッタが飛び跳ねていた。峡谷の端に少しだけ除いている平野は横から照らす太陽の光に輝き、木々の間を縫う道を通り村に帰っていく人々が立てる砂埃は、ふわふわと立ちこめて平野を霧がかかった朝のようにしていた。

¹¹³ Sabahattin Ali II, p.75.

¹¹⁴ Sabahattin Ali II, p.51.

¹¹⁵ Filiz Ali, p.84.

(「キニーネ硫酸塩¹¹⁶」)

次に、「ハサンは溺れ死んだ」から、類似した描写を抜粋する。

…樹齡何百年、もしかしたら何千年というオリーブの木々の間に伸びる、くぼんだ、両側に黒イチゴとアユットの茂る道を私はゆっくりと歩いていた。背後に昇った太陽は、私の影を車の跡のでこぼこの上に広げ、遠くまで伸ばしている。海のほうから顔に吹き付ける軽くひんやりとした春の風が、町から遠ざかっていることを思い出させるのだった。白霜の降りた土と新鮮な芝の香りが辺りに充満していた。畑の鳥やスズメたちは、チュンチュンとさえずりながら木から木へ飛び移っている。太陽の当たる場所からは、ゆらゆらとした蒸気が立ち上っていた。

(「ハサンは溺れ死んだ¹¹⁷」)

これに類似した自然描写は、短編「声」にも登場する。

…太陽が私たちの背中を覆い尽くすほどに、正面の頂に広がる松林も徐々に赤く染めてゆく。谷を急速に増してゆく暗闇の中に葬るのだった。ひんやりとした春の日だった。真ん中に流れる小さな谷はつぶやくような音を立てていた。

(「声¹¹⁸」)

さらに、「ハサンは溺れ死んだ」でも、再び似た風景が描かれる。

…何種類かの果樹の間に広がる 5 軒 10 軒の家々からなるベイオバス、そのしばらく後には大きなプラタナスの陰で崩れ落ちたまま放置された水車を通り過ぎた。すでにオリーブは終り、松林が始まっていた。日光の当たらない、影のある薄暗い海峡に降りていった。正面には、手に届きそうなほどの山がそびえ立っている。その山のまだ見えていない麓から激しく流れてくる谷の音が聞こえていた。

(「ハサンは溺れ死んだ¹¹⁹」)

この三作品における美しい自然描写に共通するものは、まず、山である。そして、太陽、風、樹木、谷の音、である。上述のようにサバハッティン・アリは自然や山を愛していた。いくつもの作品に散りばめられたこうした自然描写を見れば、サバハッティン・アリがい

¹¹⁶ Sabahattin Ali II, p.110.

¹¹⁷ Sabahattin Ali II, p.118.

¹¹⁸ Sabahattin Ali I, pp.271-272.

¹¹⁹ Sabahattin Ali II, p.120.

かに自然を愛し、五感を駆使して感じ、表現しようとしたかを見ることができる。

しかし同時に、サバハッティン・アリは自然風景の美しさを描写するだけでは終わらない。すでに引用した「アイラン」にも見られるように、サバハッティン・アリは自然の厳しさにも言及する。

次に抜粋するのは、「ハサンは溺れ死んだ」からの自然描写である。一人の男が、ある村のアーを訪ね、村娘に案内されて村まで山を登って行く場面である。詳細な山の描写が、農村に暮らす人々の過酷な生活を想起させる。

…岩場を縫うまっすぐで狭い獣道に入ると、‘赤い獣道の谷’に出た。山の背が重なり合った狭い峡谷では、岩から岩へとぶつかりながら泡立つ水が、耳一杯の大きな音を立てていた。私たちは水辺の小道を石から石へと何度も飛び移りながら歩き始めた。谷の水際まで行つては、再び山の背に登り、ゴボゴボいう白い泡を眺めたりしていた。峡谷は進むにつれて狭くなり、両側にまっすぐにそびえ立つ岩の切れ目から飛び出している大きな松の木が、横になったまま空に伸びていた。(中略) 山から転がってきて谷の道をふさぐ、家ほどの大きさをした岩と、岩の下部の柔らかい土の部分を侵食する水は、谷中ところどころで大きくそして深い池を作り出していた。

…直径2メートル半のパイプから飛び出したかのような大量で激しい水の流れは、真っ白な岩にぶつかりと突然空に出る。一瞬、ほんの一瞬止まったように見えるが、次の瞬間には流れて来た時よりもさらに激しい速さで深くぼみに純粋な泡となって落ちていくのだった。そこでしばらくぼこぼここと沸き立ったあと、ゆらゆらと右方向へたゆたい、白い岩の上を飛び越えながら流れ続けていく。人が水際まで行つて下を覗いて見ると、顔を冷たい蒸気が覆う。途切れることのない天の音は、両側にそびえ立つ岩山にこだましていた。

…谷を進むにつれ急になっていく山の斜面を、私たちは再び歩き始めた。高台に近づくと、谷の水は流れなくなり、ゴボゴボいう泡は列をなして岩から岩へと飛び移っていた。水を合間にした岩々は、ある場所で狭くなると二歩幅ほどに迫るのだった。非常な速さでこの狭い部分に入ってくる水は、長さ5, 6メートルほどの峡谷では見られなかった強さと速さで真っ黒になりながら通っていく。そこを抜けると、砂や小石の水床の上でぶくぶくと白い泡を立てていた。

…私は体から汗を流して山を登り始めた。谷は右下に見えるようになっていた。枯れた松の葉で覆われた獣道を滑って転ばないように時々ひざを突いては糸杉の枝につかまったり、つかんだ瞬間根っこごともしがみついたりして

いた。ついに勾配はゆるやかになり、しばらくすると前が開けた。ぽつぽつと生える松の木の間から、先のほうに海が見えた。

以上見てきたように、サバハッティン・アリの農村を描いた短編の中には、詳細な風景描写が頻繁に登場する。これは一つに作者の自然への愛の表れである。またもう一つ、重要な役割として、農村の社会的な位置や環境の厳しさを伝え、農村を批判的に描こうとする作品全体に大きな効果を持っていると考えられる。

5 おわりに

サバハッティン・アリが農村を描いた作品では、農村に存在した様々な問題が取り上げられ、美化されることなく描かれていることがわかった。こうした問題の中には、当時の文学において始めて取り上げられたものも多い。こうした姿勢はリアリズムに移行する中で現れてきたものであったが、そうした問題を取り上げ描いていくなかで、ロマン主義的要素を残しつつ農村に住む人々の生活の様子や、アナトリアの風景なども織り込まれていたことが見て取れた。そしてこのような描写が、作品で扱うテーマにさらなる効果を与えていたと考えられる。

こうした作品は、偶然生まれたものではない。第一章、第二章で見たように、政治的な背景、作者自身の考え方、環境や人生経験によって醸成されたと考えたことができる。それは、第三章の冒頭で見たように、サバハッティン・アリが文章を書く際の姿勢からも導くことができた。

もちろん、短編のみならず農村を取り上げた作品だけでも、サバハッティン・アリは長編小説も残している。その代表作が『クユジャック村のユースフ』である。サバハッティン・アリが描いた農村を包括的に観察するためには、こうした小説を見る必要があるだろう。また、作品の変遷を見るうえでも、詩、小説、サバハッティン・アリが発行した新聞を読むことが必要であり、これらを読めばサバハッティン・アリの文学や社会に対する姿勢、思想はじめ、作家自体と作品をより深く理解する助けとなると考え、これらを今後の課題としたい。

6 <文献表>

Şükran Kurdakul, *Çağdaş Türk Edebiyatı IV*. Ankara: BilgiYayınevi, 1992.

Ramazan Kaplan, *Cumhuriyet Dönemi Türk Romanında Köy*. Ankara: Mas Matbaacılık, 1988.

Cevdet Kudret, *Türk Edebiyatında Hikaye ve Roman*. İstanbul: İnkılap kitabevi, 1990.

Asım Bezirci, *Sabahattin Ali*. İstanbul:Çınar Yayınları, 1992.

Sabahattin Ali, *Bütün Öyküleri I*.Yapı Kredi Yayınları: İstanbul,2002.

Sabahattin Ali, *Bütün Öyküleri II*. Yapı Kredi Yayınları: İstanbul, 2002.

Filiz Ali, *Filiz Hiç Üzülmesin*. İstanbul:Sel Yayıncılık, 1997.

Zekeriya Sertel, *Hatırladıklarım*. İstanbul: Gözlem Yayınları, 1977.

Ayşe Sıtkı İlhan- Doğan Akın, *İki Gözüm Ayşe*. Ankara: Bilgi Yayınevi, 1997.

Berna Moran, *Türk romanına eleştirel bir bakış*. İstanbul: İletişim Yayıncılık, 1996.